

刻翻  
『春城日誌』(一二三)

——明治四二年七月—十二月——

春城日誌研究会

春城日誌の年末の記事に、市島はその年を振り返つて、感想を短くまとめるのを常としており、本掲載分にも「歳晚総記」と題し五百字程度のものを記した。そこには、明治四二年という年の市島の行動を端的に表されている。重複を厭わず左に引用する。

本年は、余に取つて多端の年なりし。経営三、四年に涉りたる刊行会第一期、漸く其の終結を告ぐると共に、全身を早稲田大学に投ずる事となり、さては進むて基金部長となり、理事となり、校外教育部副部長となり、出版部主幹となり、印刷会社相談役となる。幾んど早稲田に於ける校務は、皆余の双肩にかゝり来る。

病氣のため、政界を退いた市島は、明治三五年に学苑の図書館長になつて以来、高田早苗の盟友として学苑経営に邁進してきた。この引用にもあるとおり、七月の維持委員会において、市島は理事の職に就いた。理事は、市島が任じられるまで、学長の高田がその任にあつたのみである（それまでの校規には、一名の理事を置き学長と称すとある）。

他に第二期発展計画に関する募金の責任者たる基金部長、学苑の名を広く知らしめ、いわば庶民の学校たるイメージを生んだ校外教育部（講義録で学ぶ一万人余の校外生を対象とした地方巡回講演、夏期講習会などを主催）を発足させ、副部

長（部長は高田）に就いた。その他に出版部主幹として、事務を統括し、学苑関係者の経営になる日清印刷会社の相談役にもなった。

第二期計画の募金活動を、この年に精力的に行う。七月には一週間名古屋方面に出張したのを始め、日銀に勤務する校友を組織し、一万円の寄付を成功させるなどしている。ただこの頃は、景気が振わず寄付金が思うように集まらなかった。折角基金募集のため財界人や有力校友を訪れても、目的の人に会ってもらえなかったことや、色よい返事を得られなかったことなどが頻々と記されている。

市島らは、こうしたことにもめげず、粘り強い活動を展開していくのである。寄付者の主だった者へ、校資あるいは賛助員として遇することを実施した。また、校友への『早稲田学報』配布につづいて、年々学苑を巣立つ卒業生に対して、校友の意識を喚起せしめるため、この年の得業式より「校友の心得」を式に先立ち、高田、市島が諭示することを始めた。私学経営ということから、校友との関係の重要性を深く認識していたのである。

このように校務に忙殺されながらも、市島が実質的な主宰者である国書刊行会（埋もれた名著の翻刻出版事業）の第一期を推進、『新井白石全集』など一八種七一巻一帖をもって完結した。引き続いて第二期への企画に取り組み、朝倉亀三らと協議し、『甲子夜話』を含む出版計画を立案し、実施するのである。

出版というと、この年に出版部の新規事業として計画され、すぐさま実施された『漢籍国字解全書』が大成を収めた。第一回配本が十一月にあり、折からの漢籍ブームに乗り順調な売れ行きを示し、出版部のドル箱となったのである。発売後一ヶ月にして、早くも祝宴を開く程であった。

七月に『大日本地名辞書』を著した吉田東伍が文学博士に推された。新聞記者が、市島のもとに吉田および同時に推薦された久米邦武の経歴の取材に訪れている。後に市島は、彼の親戚より二人の博士が出たと回顧しているが、そ

れはこの吉田と、のちに学苑の東洋美術陳列室の礎を作った会津八一を指している。

市島の長男機は、病弱のため療養を続けており、二男昂は七月に中学を中退し坪内逍遙の紹介で杵屋六四郎に入門し、三味線を習うこととなる。「芸術の神聖なるを思へば、三味線とて一概に卑むべきにあらず。唯た斯道に傑出して名声を揚げんこと窃かに祈る所也」と記した。奔放な行状で市島を一時悩ました長女静は、八月に台湾で総督府の役人重栖健に嫁した。

家庭的なことでは、さらに亡弟豊次郎の遺族の行末を心配しなければならず、市島の苦勞は続くのである。そんな中で長女の結婚は、市島にとって朗報であった。また末女の光がこの頃一〇歳前後であったが、市島が購入した土地



10月9日～10日開催の近松門左衛門展の絵葉書

のある落合村の水川神社改築落成に、名代として遣したという記事がある。後年、日本女子大を出て、市島に常に従い、秘書役を務め、彼女が男であつたらと市島をしていわしめた人である。

(担当 金子宏二、酒井清、能登康弘、  
渡部輝子)

——一九九六・三・二七 金子記

特  
イ 4  
1919  
553

## 春城日誌

明治四十二年  
五月廿四日以降

※六月末までは前号掲載

七月

一日

雨。小林堅三、吉田半迂来る。和泉五郎、一身上の事ニ付上京、田原榮へ紹介す。田原当一肥料会社へ傭入を乞はん為也。斎藤松洲を訪ふて終に同伴、下谷伊予紋に抵り、加賀翠溪を招飲す。夕刻より矢来倶楽部に於て出版部員故西井次郎の為、法会を催すニ付出席。不在中坂本嘉治馬来訪。図書館報告成る。本年度図書増加数八千九

百余冊」(二五ウ)也。夜に入り燈下、書翰目録を修む。

二日

雨。朝来、書翰目録を修む。十時登校、維持員会ニ列す。四十二年仮決算、四十三年度予算を議す。これ迄一年の収支二十万余の処、来年度二万円を減す。余を推して理事となすの件、学長より提出せられ異議なく決す。文科更革の協議ニ移り、午後四時、漸く会を閉づ。吉田東伍を博士ニ推すの件ニ付、三宅雄次郎ニ書を与ふ。同伴ニ付、坂本」(二六オ)嘉治馬の書ニ接す。小川為次郎、石塚三郎の書ニ接す。又、堀田璋左右より名古屋史編纂ニ付、早稻田の書を借り受けんことを請求し来る。夜に入り昆田来話。

三日

今朝六時、激烈なる地震あり。骨董商某、瓦研を齎らし来る。即ち購ひ入る。下村正太郎来訪、相伴ふて明進軒ニ抵り、余の土地経営ニ付談話し、結局一千円出金の事を諾す。堀田璋左右ニ答ふ。」(二六ウ)加賀翠溪、斎藤松洲ニ書を投す。青柳篤恒の書ニ接す。午後、英堂を見る。



横浜の記念絵はかきを購ふてかへる。

#### 四日

雨。早朝、下村正太郎、昇之助同伴、豊川良平を訪ふて長時間談話。十時、辞して下村兩人を明進軒ニ伴ひ、余の土地経営ニ付、昨日の話を更らに云々し、本日三百円受取。右ニ対し先方固辞したれとも、土地を担保とする迄、「二七〇日清印刷株券百を預け置く事となす。午後二時、清国答礼大使載振貝子、大隈伯邸へ来るニ付、礼服にて接待の爲抵る。二時半着邸、伯并ニ学長より学校の状況、清国留学生の成績を報告し、留学生ニ謁を賜ふ。終つて主客、伯の花室に於て記念撮影を爲し、間もなく貝子一行退出。引続き学校の維持員会を開き、余理事ニ推薦せられたるニ付、会計監督を辞し、三枝守富を推すの件、村井吉兵衛を管理委」「二七〇員ニ推すの件、寄付者の重なるものを賛助員となす件を議決す。夕刻より、評議員参集、例のことく晚餐の饗を受け、夜に入り会議を開き、学長より諸般の報告をなし、十時散会。「現代」社主、川竹駒吉の謝状ニ接す。不在中、畠山健来訪。加

賀豊三郎の書ニ接す。

#### 五日

雨。朝来、書翰目録を修む。高田弥一郎来る。土地代金四千元の内、五百円「二八〇」相渡す。橋本圭三郎へ薬札三十円遣す。本日学校ニ於て、廿六回得業証書授与式を行ふ。式ニ先ち校友の心得となるべき事を説示する事、今年より始め、学長と余、代々諭示する所あり。例刻式を行ふ。得業生、清国留学生共合七九百余名の内、清国留学生は、十二日別ニ式を行ふニ付、本日七百余名ニ証書を授く。中央新聞記者館某、一兩日前、博士ニ推薦されたる吉田東伍、久米邦武の経歴を聞かせよと来訪ニ付、匆忙「二八九」中、小閲歴を語り筆記せしむ。夜に入り桑田春風来訪。高橋義彦、友年亀太郎の書到る。真島平三郎より仙台着報来る。

#### 六日

午前雨、午後小晴。山田清作、吉田半迂来る。大久保寛、卒業ニ付来謝、物を贈らる。下村の爲めに三菱銀行ニ串田万蔵を訪ふて、下村内政整理の件ニ付打診をなし、材

料を付托して去る。西化屋ニフロックコート并ヅボンの注文「二九オ」をなし、八洲亭ニ飯し、午後、大隈邸ニチカゴ大学教授バルトンを招き、教育家の茶話会を催す。余も亦与かる。夕刻より、紅葉館ニ校友大会を開く。余、会長代理として議事を整理し、例のことく宴会ニ移り、九時散会す。本日、下村昇之助ニ印刷会社株券十株券百株を預く。右は土地経営の為一千円出金承諾、内金三百円也。既ニ領掌ニ付、先方預りを拒みたるに拘らず、強へて担保の性質として預入る。他日、土地を担保とするの日、引取「二九ウ」る筈。

#### 七日

雨。添田寿一代人吉川某来訪。赤堀又次郎、山田清作を招き、第二期刊行会、出版物の相談を為し朝より正午ニ到る。午後より雑筆をものして夕刻に至る。学校より金百五十円也受取。赤堀又次郎の書ニ接す。晩間、神田辺ニ散策、物を購ふてかへる。

#### 八日

雨。和田万吉母の訃ニ接し、悔状を發す。小川為次郎

「二〇〇オ」

（目下出京中）、上遠野富之助ニ書を投ず。和泉五郎を田原当一ニ托するニ付、添簡を付す。西化屋、かり縫ニ来る。加賀豊三郎ニ書を投ず。午後、英堂ニ会す。夜来強雨あり。

#### 九日

尽日雨やまず。加藤万作来訪。高田、坪内を訪ふて刊行会の事を協議す。午後より、和田万吉母の葬式ニ臨む（寺蓬萊、蓮光寺）。帰途、萩野「三〇ウ」由之方へ立寄、佐藤一斎夫人の日記、別ニ二、三書簡の割愛を受け、夕刻帰宅。

#### 十日

曇天。払曉起床。二人曳の車を駆り、高橋是清を青山ニ訪ふて、基金寄付の勧誘をなす。同一件ニ付、木村清四郎を訪ふ、不在。添田寿一を訪ふて帰へる。登校、学校并ニ幹事と半日諸般の事を協議す。又、学報編輯会ニ臨み、薄暮帰宅。萩野和蒼ニ使を「三二オ」遣す。又、加賀豊三郎ニ使を遣す。中島半次郎、清国より帰朝、来訪あり。浮田和民の書ニ接す。

十一日

雨霽。小久江成一、刊行会印刷の件ニ付来る。広田金松、校友山脇胖来話。十時三十分、和田万吉洋行ニ付、新橋迄見送る。帰途、小川為二郎を数寄屋町島かねニ訪ふて、半日話す。午後、高木方ニ立寄、骨董を見る、得る所なし。今夜、小川為、高山圭三兩人を香雪軒ニ招飲す。学「三三」校の幹部の外、昆田、斎藤（和太郎）、小林等出席す。林縫之助ニ書を投ず。高山圭三ニ下村正太郎を紹介す。

十二日

好晴。堀江秀、下村正太郎来訪。増子を訪ふて、鹿島銀行ニ金百五十円也借受交渉を依頼し、先方の承諾を得。但し（勸業債券を担保となす約也）午後より登校、清国留學生部得業式ニ臨む。本年得業のもの百七十余名。偶々全国中学校長会議あり。百八「三三」十余名の校長出府中ニ付、これを式ニ招待す。挙つて出席のため、式は意外の盛況を呈したり。終つて伯邸に茶菓を饗す。引続き伯邸ニ管理委員会を開き、伯の饗を受け、九時帰宅。

上遠野富之助より来書あり。横浜開港五十年史、老部二巻の寄贈を受く。

十三日

終日蒸暑し。山田清作来る。小閑を得て双魚堂雜録を筆し、午後に至る。小川為次「三三」郎来訪、所蔵の古写経等を出し、共に鑑賞、半日を消す。高木を訪ふて、買物代の内へ金十円相渡す。西化屋より洋服一領出来ニ付と、ける。今夜、清国より帰朝の中島、中桐、海外留学の山岸、斎藤等の為同人三十名、日本俱樂部に会し、送別会を開く。夜来雨あり。田代亮介の書ニ接す。北堂へ金十円也差出す。藤原忠一郎母の訃に接す。吊電を發す。

十四日

雨。川田治一（川田棋吉子文学士）、昆田の紹「三三」介にて来り見る。今朝、坪内大造ニ托して昂を杵屋六四郎方へ遣し、三味線の入門をなさしむ。如此はわれなから意外の事也。昂、神経衰弱にて、中学の課程を終る能ハす。此一、二年頻りに音楽を弄ひ、多少の天才あるらし

く見へるニ付、逍遙とも図り、此の意外の入門をなさしむる事となれり。これ幸か不幸か、芸術の神聖なるを思へば、三味線とて一概に卑むべきにあらず、唯た斯道ニ傑出して、名声を揚げんこと苟かに祈る所也。登校、学長」(三三ウ)と共に賛助員指名の事ニ付、数時間凝議す。増子を介して、鹿島銀行より百六十余円借り受く(増子名義也、担保勸業債券二百円さし入)。午後より、切通し上野田屋ニ立寄、時代物手箱を購ふ、価十円也。小川為次郎より書状一、菓子一個来る。池畔ニ英堂を見る。不在中、田原栄来る。又、三矢重松、萩野の紹介にて来る。

#### 十五日

今日、暑熱甚し、寒暖計九十度ニ上る。」(三四オ) 尽日家居。三矢重松、蜀山旧蔵の一もと草二冊を齎らし来り示さる。田原栄、借金問題に付、来訪あり。校賓、賛助員推選内規を稿す。

#### 十六日

晴、暑熱、昨日の如し。佐藤伊助ニ電報を以つて送金を

促す。廿日送金の旨返電あり。三矢重松来訪、一とものと草、三十五円にて購入、代金渡済。山田清作来話。田原依頼の事ニ付、宮川鉄次郎を市役所ニ訪ふて話す。豊国銀行ニ浜口吉右エ門を」(三四ウ) 訪ふて登校、事を処し帰宅。田代亮介の書ニ接す。

#### 十七日

晴、本日、暑氣九十二度ニ達す。高頭仁兵衛来訪、物を贈らる。広田金松ニ玉製笏代、残金十円の内六円払。加藤、和泉を招き、半日、図書協会出納の取調を為す。尽日家居、蔵品并ニ蔵書目録を作る。

#### 十八日

晴、昨日に比すれば風あり。気温九十二度。田原栄来訪。小児を拉して向島百花園を訪ひ、浅草、上野辺ニ散策して帰へる。不在中、小川為次郎、亀井忠一、斎藤精輔来る。高木方ニ骨董を見る。三時より英堂を訪ひ、夜に入り帰宅。

#### 十九日

晴。伊藤基明、吉田半迂来る。野田屋を訪ふて骨董を見



る。午後、池畔ニ英堂を招き、半日納涼。」(三五ウ)

## 二十日

晴。本日土用入、昨日ニ比すれば却つて冷氣を覚ふ。終日家居、雑筆をものし悶を遣る。校友石橋規矩四郎来訪。南画家神樂江卷石、北越ニ漫遊センとて石渡敏一の書を齎らし、添書を請求に来る。坂口五峰、出京を報ず。幸田露伴、岡田正美ニ書を投す。在台湾和泉文三より、台北停車場詰ニ転勤の旨を報し来る。出京中の和泉五郎、今夜帰国の途ニ就く。」(三六オ)

## 二十一日

晴。斎藤精輔来訪、図書館寄付金十月迄<sup>マデ</sup>猶の事を依頼して去る。田原栄、山田清作、吉田半迂来話。今朝学長、仙台より帰京ニ付往訪。名古屋行の事を協議す。佐藤伊助より、金壹千円(土地経営の金)電送し来る。右受取の為新潟銀行ニ抵り帰途、坂口五峰を樋口屋ニ訪ふ、不在。高田弥一郎、昆田文二郎、佐藤伊助、田中慶太郎ニ書を投す。

## 二十二日

」(三六ウ)

晴。山田清作、石橋規矩四郎、坂口五峰来訪。登校、事務を見る。増子喜一郎と話す。雑賀屋<sup>マヤノヤ</sup>よりモーニングコート一領とどく。北堂の書到る。

## 二十三日

晴。小柴卯之七来話。高田弥一郎来る。金七百円相渡す。土地代金三千五百円の内金也。野田屋庄兵衛方ニ支那製菓子盆二種を購ふ、十二円即納。外ニ寿山石文珠の像を彫りたる印三顆、代九円相払。池畔ニ英堂」(三七オ)を見る。薄暮帰宅。田原栄、佐藤伊助の書ニ接す。下村昇之助来訪。明日名古屋へ出発ニ付、行李を調ふ。

## 二十四日

晴。今朝八時三十分、島村抱月、田中唯一郎同伴、名古屋へ向け発す。偶々大隈伯夫婦の国府津別邸に赴かる、に会し同車す。車中雑遣、苦熱云はん方なし。四時、名古屋ニ着、多数の校友、出て迎ふ。直ちに千種館ニ入る。今夜、商業会議所楼上ニ於て校友会あり。」(三七ウ)六十余名出席、余より第二期計画之談をなし基金寄付の勧誘をなす。上遠野等と基金募集の打合を為し、深更旅

宿ニ帰へり、大隈伯の紹介状などを認め十二時寝ニ就く。  
今夜一時、有賀長雄、青柳篤恒来着。

## 二十五日

晴。今朝、田中同伴、伯の書状を齎らし奥田正香、加藤重三郎、吉田禄在、神野金之助、滝兵衛門、岡谷惣助を歴訪し、基金寄付の勧誘を為す。午後一時より、県会議事<sup>三八九</sup>堂ニ於て、一行講演を為す。終つて経済会に招かれ、洋食の饗を受く。余、第二期拡張の主要を陳べ、又、一行を代表して謝辞を陳ぶ。散会後有志の催にて河文に招かる。校友の外、経済会の重なるもの来る。款晤十二時ニ至り宴を撤す。今夜、校友の寄付金額四千円に達す(前日校友会席の応募額とも五千元也)。

## 二十六日

晴。堀田璋左右、西川嘉儀来訪、西川より<sup>三九〇</sup>物を贈らる。西河<sup>マ</sup>は姓小田、当市有名の踊の師匠也。前年、音楽会の催しに招きたるニ付、挨拶の為来れる也。朝餐後、田中幹事同伴、伊藤次郎右衛門(松坂屋主人)、滝貞七を訪ふて基金寄付の事を談す。十一時の汽車にて、

名古屋を辞し山田に向つて発す。一行中、参宮を欲するものあり。今日、偶々閑を得たるを以て此行あり。校友多数停車場迄送り来る。桑名駅より校友高田隆平、車中に入り来る。余等を津へ迎へん為也。亀山駅にて乗換へ、桑名駅ニ着の時、辻寛、森<sup>三九一</sup>谷三雄等四、五の校友、停車場へ来りて、挨拶をなす。三時半山田ニ着。戸田家に投す。これは近年おこりたる旅館にて結構瀟洒、頗る意にかなへり。小憩の後、直ちに車をつらねて外宮を拝し、又内宮を拝す。両宮共に新築中、工事将<sup>マ</sup>さに竣工に至らんとす。一行二見の浦に廻る。余先づ旅宿にかへる。夜に入り同人、二見より帰へる。妓を召して宴を開き、深更寝ニ就く。

## 二十七日

「三九二」

晴、炎熱、昨日ニ倍す。七時三十分発汽車にて津に向ふ。九時三十分津着。多数の校友ニ迎へられ聴潮館に入る。午後一時より、曙座ニ於て講演会を開く。会場炎熱甚しく流汗、衣類を濡はし襯衣用ゆ可らざるに至る。夜に入り聴潮閣楼上に有志懇親会あり、六十名程出席(過半は

校友なり)。余、学校の第二期拡張ニ就て、一場の演説を爲す。夜分に入るも炎暑甚しく、校友の有志、余等のために舟を岩田川に浮べて舟遊をなす。今夜〔四〇才〕有賀、一行に先ち帰京の途ニ就く。

### 二十八日

晴。今朝、島村、青柳先発、帰京の途ニ就く。田中同伴、朝餐後、森谷三雄、松本恒太郎の二校友、川喜田四郎兵衛、田中次郎左衛門、真弓長之助を歴訪して基金の事を云々す。午後〇時四十分、津を辞して名古屋ニ向ふ。途次桑田ニ下車、諸戸家を訪ひ、精太、精吾を訪ふて大隈の意を伝ふ。四時半辞して名古屋ニ着。千種樓ニ投す。夜に入り上遠野富之〔四〇才〕助来訪、諸般の打合をなし、十二時ニ到り別る。今夜、多少涼味を覚ふ。

### 二十九日

晴。朝餐後田中同伴、春日井丈右衛門、森本善七、伊藤由太郎、安東敏之、服部小十郎、武山勘七、鈴木惣兵衛を歴訪す。鈴木の外、すべて不在。午後より小閑を得て、二、三の書簡を認め東京へ発送す。上遠野富之助、小山

松寿、堀田璋左右来話。本日午後、旅館涼気を感じ、身心爽快を覚ふ。〔四一才〕

### 三十日

晴。名古屋滞在、今朝、伊藤松坂屋遊説の件ニ付、小山松寿を訪ふて云々す。松寿単行、守松ニ面して云々す。帰来、未決の旨を報す。右ニ付小山同伴、上遠野富之助を訪ふて協議す。滝兵衛門より使者来る。高田早苗、伊藤正ニ書状を發す。午後、春日井丈左衛門を訪ふて基金の勧誘を爲す。学校より五十円電送あり。堀田璋左右ニ麦酒半打を贈る。堀田、市史の材料を齎らし来り見す。小山、永田来訪。神野、伊藤、寄付金一件ニ付、上遠〔四一才〕野、夜に入り二回来る。

### 三十一日

晴。今朝、神野を訪ふ。偶々上遠野来る。寄付金の事を協議す。神野、兎角土地の慣習を云々して自から決せず。且、早稲田に対する寄付を、神社ニ対する寄付と同視する如き趣あり。大隈伯ニ関係あるに拘らず、些の同情なきもの、如し。到底、神野云々することき寸法にては、

学校の体面を汚すの傾あるにより、寧ろ中止して時機を待つより外なしと決し、上遠〔四二オ〕野井ニ小山ニ図る。兩人も共々、再筭を可とす。青柳篤恒の書ニ接す。当地の状況を細書して、茅ヶ崎にある高田学長ニ報す。学校并ニ宅ニ、今夕帰京の途ニ就く旨を電報す。大坂大火の報到る。今朝より出火、壱千戸以上を焼き払つて火勢益々熾なる模様。今夜八時三十分の汽車にて発す。旅宿より発する途中、自転車の偶々余の車前に顛覆するに会し、車夫蹣つき、余も車より落ち、両膝頭ニ微傷を負ふ。汽車中、校友信夫淳平の仁川に帰へるに会し、同〔四三ウ〕車す。車中蚊多く眠る能ハす。寝台を購ふて一睡。

八月

一日

午前七時四十分新橋に着。校員、家人出迎ふ。直ちに帰宅。不在中の雑信を検す。賀田直治、和泉文三より静身上ニ関する書簡あり。静一身上の事は賀田直治ニ一任し

二日

置し処、今回長崎常（総督府技師）夫婦の媒妁にて島根県人重栖健〔四三オ〕（宜蘭庁農会主任属五級）に嫁する相談纏まり、七月二十三日台湾神社に於て式を挙げ、鉄道ホテルニ於て披露をなし、二十八日任地へ同伴する由申来る。此の婚儀ニ付ては、仕度万端賀田夫人遺憾なくと、のひ呉れたる趣、厚意謝するに余りあり。佐藤伊三郎より来書あり。今回新潟銀行辞任ニ付、挨拶を申来る。幸田露伴より答書を得。過般相談ニ及びたる三味線の銘ニ付、山おろし、木枯し、青あらしなど然るべしと申来る。橋本医学士より長男病状を云々し、転〔四三ウ〕地の必要を申し来る。落後生来話。和泉五郎の書ニ接す。富塚格治、吉田半迂来訪。不在中の事を整理する為終日家居。午後驟雨あり。和泉文三に細書を投し、静婚嫁の事ニ付云々す。新聞紙報ず、大坂の火災延焼二里に及び、焼失戸数二万ニ上ると。

朝小雨あり。参校、二、三の事務を処し、了つて英堂を訪ふ。大江乙亥門、一身上之変革を云々し来る。不在中



高田半」<sup>(四四オ)</sup>峰來訪。夜に入り、半峰を訪ふて深更迄話す。田原榮来る。

### 三日

小雨。増子喜一郎、山田清作、赤堀又次郎、青柳篤恒、安田恭吾等交々來訪。飛鴻堂印譜、文求堂へ返還。本日圖書之暴書を為す。大江乙亥門、大久保某又来る。

### 四日

時々驟雨到る。神楽江卷石來話。久須美賢介來り物を贈らる。山岸光宣、近日」<sup>(四四ウ)</sup>洋行之途ニ上るニ付、告別のため来る。青柳篤恒來り、羅振玉、明朝早稲田へ来る趣を云々して去る。午時、不忍池心亭ニ涼を納れ、英堂を見る。坂口五峰ニ托したる沼垂縞三反到達。飛鴻堂印譜文求堂へ戻し、代本并ニ原金受取。前年同店より購入之銀字高麗經殘金式十五円也払済。川田治一來訪、目下帰朝中の朝鮮宮内官井上雅二に添書を与ふ。新潟ニ大火あり、坂口五峰ニ見舞状を發す。周防山口出張先より發したる江部淳夫の書到る」<sup>(四五オ)</sup>。

### 五日

時々驟雨到る。蒸すか如き暑熱、昨日ニ倍す。今朝、清国農科大学監督羅振玉、早稲田大学へ来るに付早朝より登校、迎接之準備を為す。九時過羅氏參校、青柳篤恒を通訳として約二時間之談話を試む。皇侃札記義疏、高麗銀字写経其他圖書を示す。羅氏満悦、余に贈るに自書の楹聯并ニ紅霞山房の額面を以てす。明日小供等引率、塩原へ避暑行を為すニ付、行李を調ふに忙ハシ」<sup>(四五ウ)</sup>。

### 六日

今朝四時より起き、二子三女を引率し、五時四十五分上野発汽車にて塩原行之程に上る。十一時西那須に着。昼餐後、馬車売台を買ふて塩原へ向け發す。塩原古町迄行程五里半、関谷、大綱<sup>アキ</sup>、福渡<sup>フクワタ</sup>の諸駅を経て、塩原古町に達す。此間山水の風景よろしく、涼気体に可也。途次驟雨しはく<sup>く</sup>到る。但た道路平坦、家族団欒の車行もなか／＼に興味を覚へたり。楓川楼ニ投す。此楼は塩原古町」<sup>(四六オ)</sup>の一端に在り、実に塩原のはづれ也。絵はかきを認め留住宅へ投す。此楼塩原第一の楼なれとも、飛入の事とて当てかへれたる一室は、狭隘なるのみならず、

山水の眺望もなく不愉快限りなし。今夜は一行六人折り重なりて押しずしの如く臥す。有賀博士、当地に來りあるを思ひ出し宿に問へは、近辺の寺を借り受け居ると云ふ。

#### 七日

晴又陰、時々驟雨到る。朝餐後散策、門前に抵る。此辺の村落未だ甚だ振ハす。豆州の「四六」修善寺に比すれば、一段下るを覚ふ。隨筆をものして半日を消す。樓主に請ふて、居室を溪流を見晴す処に移す。八畳ニ六畳二間つゝ、きにて、判任部屋より急に勅任部屋ニ転したる思を為す。二間一日の室代三円と云ふ。価不廉なれども現今浴客充満の折柄、斯る価を徴せらるるも是非なき事と云ふべし。一間を隔てて関根正直の在るに会し、共に語る。女は、室ニ備ひつけある琴をかなて、慰みよろこぶ。漸く浴場ののんきなるを覚ふ。在茅崎の高田、在京都の下村正太郎に絵「四七」はかきを投す。午後より機は、写真機を携へて撮影に出かけ、女子供は、花を折らんとて山にゆく。吾れは、涼風に全身を浴び七川柳を読み

つゝ、睡る。児女の歸り來り、打さばくに夢を破られ起き來れば、五体のんびりして初めて避暑地の愉快を感じ。

#### 八日

晴。五時頃より皆起き立つ。朝の冷氣晩秋のことく、単衣一枚にて凌きかたき程也。寒暖計を検するに七十一度也。朝餐「四七」後、一、三の書簡を東京ニ發して用を弁し、紀行を作るに二、三時間を費す。倦み來り子女を拉して逆杉、三位窟を訪ひ、帰路草花を折り來り、之れを花瓶に投して床上を飾る。今日、関根正直、東京へ歸へると告別之為來る。有賀より來翰あり。午餐後、其の仮住居なる妙雲寺を訪ひ、暫時談笑して別る。午後、紀行を書きつゝ、小兒は、無聊なりとて、男は、風景を撮影し、女は筆を撫す。有賀の「二男遊びに來る」（四八）。

#### 九日

晴。六時起床。寒暖計七十二度。九時迄紀行執筆。子女の促すこと切りなるに、已むなく筆を投して、一行竜化の滝を見んとて宿を出づ。前日、馬車にて經來りたる郷中の諸字を徒歩にて經、白雲洞辺に一行紀念の写真を撮

り、左に折れて山路をたどり行く。二三町はかりの間、密樹天を蔽ひ、下に溪流あり、処々棧橋を架して通す。忽ちにして淙々の声を聴く。これ竜化瀑の最下層にて、即ち竜尾ニ属する所。更らに登ること半町許にして、大瀑布「四八九」を得、これ竜の頭部也。頭尾の間、屈曲して一、二滝を為すものあり。即ち此の数個の瀑布の蜿蜒蛇勢を為せる形より、此名あり。兎此処に一枚を撮影す。但た気温甚た低く、病児の爲め久しく留まるを不可とす。即ち勿々帰途ニ就く。東京へ置き忘れたる食物と、く。和泉信平より来書あり。又学校より電信為替着。有賀夫人来訪。夜に入り有賀夫婦来話。楼上珍藏の高尾（初代）木像を見る。睡余小録ニ載せある山東京伝の藏品にて、此楼の前主人、家と共に今の「四九五」楼主に伝へたるもの、よし。元禄製長持に擬したる手箱の内に蔵しあり。像も箱も珍とすべきもの。

#### 十日

晴。早朝五時半、寒暖計七十五度。佃煮を有賀ニ贈る。有賀より返札に手製のすしを贈らる。水三十種を筆して

半日を消す。坂本三郎来訪、二時間余り談笑して別る。東京宅より小供へお伽噺をおくり来る。午後散策、化石、絵はかき等を購入。朝来しばく地震あり。機病「四九ウ」氣の都合により昂同伴、今朝先づ発し帰京す。正午、気温八十五度、滞在中尤も高度なり。夜に入り、前川、十数の男女燈を提げ、水中に驚歩して魚を捕ふ。燈影水ニ映して頗る趣味あり。兎等大いによろこぶ。明朝出發ニ付勘定を為す。総計七十円余、これに往復旅費、茶代等を合算すれば百円を超ゆ。一掬の涼味を購入ふ価も亦不廉なる哉。

#### 十一日

小雨あり。今朝八時、馬車を僦ふて帰京の途ニ「五〇オ」就く。告別之ため有賀并ニ坂本の宿ニ立寄る。十時、西那須に着。此辺も冷氣甚しく、幾んど単衣凌ぎ難きほど也。十一時二十分の急行汽車ニ投し、三時上野ニ着す。不在中之書状ニ接す。高田半峰、倉岡勝彦、関栄太郎、飯田新七、長沢範男、長田忠一等より来書あり。昆田謙一母并ニ木村傘市母の計ニ接す。長沢より呉浚明の書簡

一到達す。東京も今日は極めて冷氣也。ホノル、発和田万吉の書、那波活所の遺印を捺せる内藤湖南の書到る。

高根義人子息、鎌倉海岸ニ游」(五〇二) 泳中変死ニ付、悔状を発す。木村、昆田にも同断。

## 十二日

山田清作来る。刊行会最終之印刷四冊の内二冊出来、残る二冊千部印刷出来之旨を報す。吉田半迂来る。漆工高橋得夫に托し置ける螺蛳の印箱、同シヨク修繕出来。昆田方へ悔ニ行き、香典二円贈る。高木方を訪ふ、得る所なし。正午、英堂を見る。夕刻迄話して帰へる。不在中江部淳夫来訪。三省」(五一才) 堂より新刊百科辞典第二巻を贈らる。

## 十三日

晴。尽日家居。神楽居熏、新潟県漫遊ニ付知友ニ紹介状を与ふ。友年亀三郎、朝鮮に行くとして、来つて別を告ぐ。午後、下村正太郎来訪。高田半峰へ書を投す。小林豎三来話。大江乙亥門も亦来る。夜に入り下林貞雄、亡弟母子の件ニ付来話。」(五一ウ)

## 十四日

晴。早朝金尾種次郎(文淵堂)、内藤厩次郎の紹介状を齎らし来り、朝鮮海印寺藏高麗藏経原版を以て、或る部分を刷行し、之れを世に頒布せんとする計画を報す。余、其の賛成者に署名を為す。種村宗八、漢籍国字解の趣意書、解題等の件ニ付来訪、余の意見を徴す。昆田来訪、来十八日、建部遯吾洋行送別会之件ニ付云々して去る。坪内を訪ふて、出版部之事を協議し、又沙翁傑作」(五二才) 集出版の件ニ付協議す。演芸研究所落成に付一覽、午餐の饗を受け、談話数時間に涉り帰宅。

## 十五日

記事を失ふ。愛岐二県大地震の報あり。

## 十六日

晴。高田学長、避暑地より立帰りニ付早朝より訪問、出版部其他之事ニ付半日協議。偶々下村正太郎来訪。同人之問題ニ関し協議、十一時辞し去り、池畔ニ英堂を」(五二エ) 見る。

## 十七日



晴。坪内妻来訪。大造身上之件ニ付懇談あり。物を贈らる。栗山精一來訪。下村の爲め、第三銀行ニ原田厩太郎を訪ふて話し、帰途下村を訪ふて話す。高木方ニ立寄り、淀屋革の支那文庫を購ふ。価九円也。午後より登校、学長と事を処し、牧野謙次郎を訪ふて、漢籍国字解の問題を稿せんことを托す。鎌田より、昨日男子分婉之趣報じ」(五三才) 来る。

#### 十八日

晴。赤堀又次郎、山田清作来る。種村宗八に、漢籍国字解全書巻頭の趣意書を口授筆記せしむ。吉田半迂来訪。近刻「護封」之印を贈らる。外資借入之件ニ付、前島弥と共に下村正太郎を訪ふて協議し、午餐を共にして去る。神樂江熏、新潟より発信に接す。夕刻より富士見軒ニ抵る。建部遯吾、近日洋行之途ニ上るニ付、新潟県同人、送別を」(五三才) なさん為也。溝口伯外同人十数名出席。余、席上送別演説を爲す。下村兩人、前島弥、外資之件ニ付、会場迄訪ね来り、協議を遂げて去る。夜来雨あり。

#### 十九日

晴。安田恭吾来り、徂徠の巻を示す。今朝、実業団代表者、米国の招きに応し出発するニ付、余は洪沢男、中野武營、日比谷平左衛門、上遠野富之助、巖谷小波等の知人を送るため、十時十分新橋ニ抵る。見送人、ブラットフォームを埋め」(五四才) 身動きもならぬ盛況を呈したり。高橋義彦より来書あり。近刻之印、数顆を示さる。内田貢の書ニ接す。丹呉翁ニ書を投す。又、賀田直治ニ細書を投す。増子喜一郎来話。

#### 二十日

晴、夜に入り雨あり。山田清作、広田金松、坪内大造来訪。下村兩人来訪、物を贈らる。温故雜帖の目錄を作り、半日を消す。田中唯一郎来話。今夜建部遯吾、洋行之途ニ上るニ付、新潟<sup>橋</sup>まで」(五四才) 見送る。

#### 二十一日

晴。内田貢来り、図書館雑誌と丸善の關係につき云々す。牧野静斎、国字解々題の稿を齎らし来る。小久江成一と出版部の事を云々す。報知記者平渡緒川、吉田半迂来訪。相沢潔、下林貞雄来訪。守屋此助の書ニ接す。蘇氏印略

印行成り、余予約之外四部世話を頼むとて持参。温故雜帖の目録を作り半日を消す。」(五五才)

## 二十二日

昨夜大雨あり、今朝晴。蘇氏印略ニ関し四宮憲章、高橋義彦ニ書を投す。大丸昇之助ニ書を發す。藏六の書ニ接す。坂本嘉治馬、沙翁傑作集出版ニ付來話。万屋来る。不用の圖書を売却し、金十円高木骨董鋪に払ふ。温故雜帖之目錄漸く修め終る。守屋此助ニ宗家宛添書を与ふ。中井敬所を病床に訪ふて、岱海翁遺印之鑑定を乞ふ。中一つ(両面印)高芙蓉之刻あり、初代藏」(五五ウ)六、益田勤斎の刻もあり。英堂を見て、夜に入り帰宅。加賀翠溪より、長沢舊雪の魚印々影を贈らる。高田学長より來書あり。

## 二十三日

小雨。今朝、出版部ニ抵り、部員を会して講義録号外の件を協議し、十二時ニ至る。図書館ニ一、二の事を処してかへる。校用書翰三、四通を認む。半迂来る。近堀の蘇氏印略を示す。四宮憲章の返翰到る。出版より近刊書

天文学講話、地史学講」(五六才)話を贈り来る。中野礼四郎、史談会の藏書を早稲田の文庫へ預け入る、件ニ付來話。桑田正、朝倉亀三の書ニ接す。

## 二十四日

払曉大雨あり、七時頃収まる。下村の件ニ付、串田万蔵を西久保明舟町ニ訪ふ、不遇。終に三菱銀行ニ訪問之上談す。未要領を得るに至らず。本日、下村より二百円請取、土地経営費之内也。勢尾旅行記事を筆し、学報ニ投ず。大江乙亥」(五六ウ)門來訪ニ付、河東田経清宛紹介状を与ふ。羅振玉聯幅表装成る。書翰三、外直し一、表具屋へ遣す。

## 二十五日

晴。牧野静斎、種村宗八来る。高木方に堆黒合香一、乾山の画六枚購ふ。又、野田屋方ニ黄楊木印篋を購ふ。英堂を見る。不在中、小久江来る。大久保寛之書ニ接す。又、林縫之助の書ニ接す。晚間、山田清作來話。」(五七才)

## 二十六日

晴。朝来、東儀季治研究所の件ニ付、小久江成一、種村宗八出版部之件ニ付、林縫之助刊行会将来の件ニ付、山田清作一身上之件ニ付交々来訪。辻川武之進又来訪あり。安田善之助より、廿八日欣賞会之案内来る。午後、反故しらべ、庭掃除にて半日を消す。高橋義彦より近刻を示さる。

二十八日<sup>(ツマ)</sup> 後

晴。早朝より林堯臣、片山尚綱、種村<sup>(五七ウ)</sup>宗八、山田清作、中野礼四郎、吉田半迂、書肆万屋、伊東知也等交々来り応接ニ忙殺せらる。米国市俄古発和田万吉の書ニ接す。日本人主筆三宅雄次郎より、余の百水一言を掲載せんことを請求し来る。依つて、午後より未完之部若干を稿す。

二十七日<sup>(ツマ)</sup> 前

晴。早朝より家を出で、書肆万屋ニ立寄、蔵六を向島に訪ふて話す。偶々坐中アウンバラバあり、印話を為す。午時<sup>(五八オ)</sup>蔵六と雲水ニ食事をともにし、別る。透邇錦亭ニ入り涼を納る。英堂も来る。夜に入り帰宅。高橋

義彦へ蘇氏印略二部小包郵便にて発送。

二十九日

早朝、坪内大造一身上之事ニ付来訪。学長を訪ふて、出版部の事を協議す。午後、高木弘方に骨董を見る。金十六円也、品物代金之内へ払。近<sup>(ツマ)</sup>かく朝鮮に於て掘出せる雲鶴青磁の菓子皿二個を購ふ。驟雨あり。不在中佐藤伊三郎<sup>(五八ウ)</sup>来訪、物を贈らる。万屋より古本払、代金五十五円受取。機、今朝信州戸倉温泉ニ向つて発す。保養之為也。夜来雨あり。

三十日

陰。小林堅三、図書館會計之件ニ付来る。種村宗八来る。講義録号外之件を協議す。島村抱月来訪、校外教育部方法ニ付話す。尽日家居、百水一言を筆す。<sup>(五九ウ)</sup>

三十一日

浦塩発建部遜吾の消息到る。山田清作、刊行会之事ニ付来る。大江乙亥門、一身上の件ニ付来る。百水一言を淨写し、五十則成る。晩間携へて牧野を訪ふて示す。信州戸倉發機の書到る。<sup>(五九ウ)</sup>

九月

一日

二十十日、多少の風あり。朝来二、三の客あり。百水一言五十則を浄写し、牧野方へ遣し、字句の訂正を請ふ。ヴァンダイク集、ラスキン集水の部を読み、半日を消す。広田金松より園女の懷紙一幅を購ふ。電話機を架設するに付、学校と郵便局の間ニ交渉す。学校所有の電話を余の名義にて架設の事。夜来雨あり。(六〇オ)

二日

小雨。五峯、出京を報ず。半迂、近作を示す。山田市郎、牧野謙来訪。百水一滴稿成り「日本人」に投ず。ラスキン并ニヴァンダイクの山水論を読む。

三日

小雨。今朝下痢一次。杉山令吉、種村宗八、吉田半迂、広田金松等交々来訪。和田万吉、ナイヤガラ発絵ハガキ来る。本日、電話機架設済、番町二四二一号也。午後、英堂ニ会す。種村より沙翁(六〇ウ) 集出版の件ニ関し、

来翰あり。

四日

小雨。石井、石黒の館員来る。九月以後の部署を定めて云々の事を命ず。種村宗八、沙翁出版の件ニ付来る。交渉之為余自ら、坂本嘉治馬を訪ふて大体を決す。高橋義彦より蘇氏印略代十五円送り来る。伊藤基明来訪。菊池三九郎より近著書画百詠を贈らる。高木弘を訪ふて、小石置物一を購ふ。午後、続百水を作らんと欲し、材料の取調を為す。安田(六二オ) 恭吾来る。夕刻より矢来倶楽部に出版部員を会し、余の同部主幹となりたる披露を為す。

五日 日曜

曇。片山尚綱より市島万術の墓誌謄本を贈らる。此墓誌片山の祖父稿する処と云ふ。万術は、新発田市島にて余の一族也。此文、家に伝らず、故に謄写を囑したるなり。双魚堂雜録に収め存すと云ふ。坂口五峰来訪。談話中、桂湖村来り。近頃朝鮮ニ抵り、高麗青磁研究の結果(六一ウ)ニ就て談話あり。午餐をともして別る。増



子喜一郎、三島良藏（校友）来話。賀田直治より来書あり。下林より欣二の件ニ付来書あり。片山尚綱、大隈信常ニ書を投す。

#### 六日

曇。第二期刊行会の件ニ関し、林縫之助、早川純三郎来話。田原栄来訪あり。参校、学長と校務を処す。出版部に抵り、事務を見る。内田貢、桑田春風の書ニ接す。江部妻の母来訪あり。」（六二〇）

#### 七日

雨気濛々。朝来頭痛を覚ふ。掛物箱五本、番町ニ人を遣して買ひもとむ。伊藤基明、山田清作、加藤万作来訪。又、桑田春風来訪る。鉄網録六冊、手紙雜誌材料に貸付。登校、島村抱月、青柳篤恒と校外教育部組織方法を協議し、午時ニ至り已む。図書館を見て帰宅。理工科教務主任牧野啓吾の計に接す。続白水を筆す。」（六二一）

#### 八日

雨気濛々。早朝、早川純三郎第二期刊行会の件ニ付来訪。牧野啓吾死去ニ付会葬之為、荏原郡大崎村清岸寺ニ抵る。

刻翻【春城日誌】（一二）明治四十二年九月

午時、英堂を見る。五時五十分汽車にて留学生三潛法学士帰朝につき出迎ふ。今夜、日本俱樂部ニ理工科教員会議を開く。余も亦与かる。小川為次郎の書に接す。堀田璋左右より、尾張奉行所の印影をおくり来る。」（六三〇）

#### 九日

晴。下村昇之助、小林堅三、山田清作外二、三の雜客あり。五峰又来る。小川より宇治黄蘗山の重宝陳賢之観音を写真版となしたるもの一帖を贈らる。五峰と午時上野常盤華壇ニ遊び涼を納る。浜村蔵六も来り会す。夜に入り帰宅。北堂、明朝来着の電報あり。紐育発和田万吉の絵はがきを接手す。広田より平戸製香炉一、大久保書簡購ふ。

#### 十日

今朝、北堂安着。丹呉より、お志は離縁の事に付云々の談あり。午後登校、事務を見る。又、出版部に抵り、事を処す。今夕、矢来俱樂部に出版部事務員を会して、余の就任披露をなし、訓示演説を為す。吉田東伍を訪ふて帰へる。赤堀又次郎、増子喜一郎の書に接す。夜来雨あ

」（六三三）

り。

### 十一日

雨。鹿島銀行へ手形切りかへ、今日より以往六十日間百六十余円約束手形差入、富山房」(六四オ)坂本へ手形切かへ(壹千円)、十月三十日期限之約束手形差入。小川為次郎ニ書を投す。尽日家居。安田恭吾来り、螺蛳製五段箱を売る、価十六円未払。少しく風邪を感じ、午後より蓆上に在り。二百廿日なれども天候平穩、時々雨あり。風なし。

### 十二日

日曜。朝来、下林貞雄、江部淳夫、坂口五峰、朝倉亀三交々来訪。下林と亡弟妻の件に付協議す。五峰より小崎懋胃」(六四ウ)癌に罷りたる旨を聞く。客去る後、高木弘方を訪ふ。得る所なし。古万古の器一返却。英堂を見る。夕刻、帰宅途中驟雨に遇ふ。不在中、佐藤貞雄来訪、物を贈らる。加賀翠溪、神楽江董又来る。紫安新九郎又来る。

### 十三日

終日、雨。今日九時より学校に始業式挙行に付、定刻抵る。事務を処し、午後三時ニ到る。坂口五峰来訪。金百円学校より請取。内三十円坂口ニ貸付。」(六五オ)(六六円反物代、壹円五十銭長沢範男へ書翰代、差引二十二円五十銭同人かし)帰宅後、安田恭吾書画を齎らし来り示す。下林、鎌田を招き、亡弟妻離婚之件、小児等処分之事ニ付、深更迄協議す。

### 十四日

晴。山田清作、種村宗八、吉田半迂、村山亀一郎来訪。高木を訪ふて、鶏血の印材一を購ふ。気分すぐれず。午後、登校を見合せ家居。続百水」(六五ウ)一滴の材料を蒐む。横山又次郎を訪ふ、不在。

### 十五日

曇。大江乙来訪。昨朝、男子出生之旨を報す。戸倉温泉に保養中の機へ三十五円送金す。登校、博覧会出品の件、学報編輯、校外教育部組織等の件ニ付協議す。大久保公書簡鑑定を依頼したる前島男より電話来り。往て、男所蔵の公の書簡と対照、真蹟と決し、雑談時を移して帰へる。

機送金と行違へ帰宅。不在中、丹呉康平来訪。」(六六オ)

十六日

晴。終日蒸しあつし。朝来二、三の客あり。出版部ニ抵り事務を見る。又、登校事を処す。今夜、偕楽園ニ二水会を開く。校友紫安新九郎出京ニ付、招飲。ボストン発和田万吉の書ニ接す。

十七日

雨。二、三の来客あり。登校事務を見る。午後より、切り通し野田屋ニ往き、印材を購ふ。英堂を訪ふて、夜に入り」(六六ウ) 帰宅。

十八日

雨。郷人之囑ニ応し、屏風之揮毫を試む。筆自在ならず。五、六枚書き損してやむ。出版部ニ至り事務を見る。又、登校事を処す。北堂、今夜十時之汽車にて帰国ニ付、お志保離縁、小供等引取之件ニ付、熟議す。夕刻より出版部之経営披露之為、府下各社に在る早稲田出身の記者を上野常盤華壇に会し、余より新聞」(六七オ) 記事の掲載を依頼す。関達二より物を贈らる。

十九日

雨。日曜。終日家居。郷里の学生数人交々来訪。続百水一滴の材料しらべにて半日を消す。佐藤伊助、堀江秀の書ニ接す。

二十日

雨。登校事務を見る。又、出版部の事を処す。今夜、余の土地経営問題ニ付、高田」(六七ウ) 増田、昆田、増子(昆田は賀田の代人、増子、佐藤伊助代人)を亀崎町偕楽園ニ招き、左之件を協定す。余の所有の土地の価の騰貴する迄(仮に五ヶ年と定め)出資者六人(増田、賀田、内藤、佐藤、坂本外一人未定)各一千元を出金し、年五分の利を以て継続し、利子は土地の売却処分を為したる時計算、元金と共に土地売上代金之内より返済すること、なし、高田は出資者にあらざる代りに、余の為に保証之位置に立ち、増田は出資者総代として、登記の場合も増田宛借用証を」(六八オ) 作る事。但し土地を担保に差し入る、事等を決し、深更に至つて別る。

二十一日

雨霽。赤堀、黒川真道、山田清作来訪。北堂安着の報到る。登校事務を見る。青柳手にて立案中之校外教育部規則成る。学長、部長、余、副部長となる仕組也。羅振玉より拓本四通を贈らる。文芸協会研究所落成披露に招かれ、坪内方に抵り、学生の舞踊練習を見る。晚餐の饗（六八九）を受け帰宅。来月図書館ニ於て、近松門左衛門の著書陳列会并ニ講演会を開くの件ニ付、坪内と協議の上、廿四日富士見軒ニ打合せの会を開くに決す。

## 二十二日

晴。近松展覧会の件ニ付、饗庭篁村ニ書を投す。水谷不倒、梅沢和軒来訪。近松会ニ付、幸田露伴に書を投す。出版部ニ抵り事を処す。登校事務を見る。晩間、高木方ニ骨董を見、唐（六九七）らもの木像観音一、螺蛳時代手箱一、宝山急須一を購ふ。金十円也払。

## 二十三日

晴。高木方ニ至り、梅金蒔絵白粉解香合一を購ふ。骨董四点もとす。万屋ニ雑本を売却し、参校。基金募集之件、運動世界（雑誌）、出版部にて経営等の件を協議す。長

谷川文作、林縫之助、三浦宗春の書ニ接す。

## 二十四日 秋季皇霊祭（六九八）

夜来雨あり。今朝降りつゝく。山田清作、昆田文二郎来訪。長時間談話して去る。午時、松兼に飯し英堂を見る。今夜、富士見軒に坪内逍遙、島村抱月、饗庭篁村、水谷不倒、伊原青々園を会し、来月図書館ニ近松巢林子の忌辰圖書展覧会并講演会を催すニ付、其の準備の相談をなし、九時散会。不在中、三浦宗春子息、山崎恒四郎来訪。終日雨あり。

## 二十五日

雨霽、種村宗八、山田清作、三浦卓爾来訪。水谷不倒来訪。近松会の事を協議す。登校事務を処し、終日忙殺。近松会ニ付属之陳列会ニ関し、赤堀又次郎ニ書を投す。紫安新九郎の書ニ接す。実業日本記者藤原喜一來訪。北越実業家に就て余の談話をもとむ。廿八日再来を約して去る。二十七日市立深川図書館開館式ニ付、尾崎市長より案内状来る。

## 二十六日 日



晴。本田信教、吉田半迂、広田金松、齋「(七〇ウ) 藤書店、報知記者某交々来訪あり。米国ニューヘブン発和田万吉二通の絵はかき到る。高木方に抵り、木彫置物一を購ふ。十二円五十錢買物代之内へ払。小川為次郎より、為替入書状到達、立替書物代料也。児女を拉して、招魂社境内ニ散策し四谷に廻り、物を購ふて帰へる。賀田直治の書ニ接す。

#### 廿七日

夜来大雨あり。朝来降りつゝき、午後ニ至り漸く罷む。近松会ニ付出品借受「(七一ウ) の為、安田善之助、角田真平、大橋義三其他四、五の知人ニ書状を發す。同会講演会ニ出演を求むる為、在京都幸田露伴ニ書を投す。下村正太郎ニ書を与ふ。登校事務を見る。運動世界雜誌を出版部ニ於て経営せん為計畫の為、半日を消す。

#### 廿八日

好晴。馬瀬長松、一身上之件ニ関し来訪。野口多内、黒川真道の書ニ接す。今朝、機、再び保養之為信州戸倉温泉へ「(七二ウ) 向け發す。実業日本社記者藤原喜一、越後

氣質を質問に來り。一時間余説示す。登校事務を見る。二時より勢州を訪ふて、夜に入り帰宅。

#### 廿九日

曇、冷。安田恭吾來る。骨董代之内十円渡す。山田清作來る。林甕臣又来話。高橋義彦より蘇氏印略代十五円受取。関根正直、久保田米斎ニ書を投す。丹呉勝吉、明朝帰京之旨、報告あり。登校事務を見る。「(七三ウ)

#### 三十日

雨。今朝、丹呉勝吉、亡弟遺児二人を越後より連れ帰へる。遺児の為、丹呉家へ預けありし壺千円之内五百円領掌。折角連れ歸りたる欣二、午後に至り勝吉之荷物より金を盗み逃げ去る。下林、鎌田を招きお志保離縁ニ付ての当方ニ対仕向け方、欣二脱出之事等を協議して夜に入る。三郎を勝吉ニ預く。下村正太郎より來書あり。装潢を托せる名家書翰三卷成る。お志保離縁ニ関し、長文の書簡を北堂に郵送す。「(七四ウ)

十月

一日

雨霽。中井敬所の訃ニ接す。石黒男を訪ふ、不遇。第一銀行より五十円手形金受取。添田寿一を興業銀行ニ訪ふ、不在。坂本四方太を大学図書館ニ訪ふて話し、田中館愛橘を物理学教室ニ訪ふ、不在。琳琅閣ニ立寄、学校之仕払百円相渡。都鳥ニ飯し登校、事務を見る。

二日

「(七三オ)

曇天。昨夜来頭痛を覚ふ。熊倉操の訃ニ接す。書を投して小崎藍川の病を問ふ。藍川近来、胃癌ニかゝる。田辺久蔵、過日死去ニ付吊状を發す。添田寿一代人吉川孝秀来訪。登校事務を処し、午時上野迄散策。午哺の後、本所番場町妙源寺ニ執行之中井敬所葬儀ニ臨む。帰途、高木方ニ骨董を弄し、金十円也勘定の内へ払。不在中三潯信三来訪あり。

三日 日曜

「(七三ウ)

晴。早朝、小田島彦太郎上京、来訪、物を贈らる。広田

金松、斎藤琳琅閣、山田清作等来る。熊倉操死去ニ付、谷中全生庵へ葬送。团子坂ニ骨董を購ふ。又、切通し野田庄ニ骨董を弄して半日を消す。五時より勢州を訪ふて、夜に入り帰宅。今朝、落合村氷川神社改築落成式あり、末女を遣す。野田屋へ二十円払。

四日

音楽学校邦楽調査員館山漸之進、平家歴史の編纂を終り、右出版之「(七四オ) 相談之為来る。吉田半迂来る。早朝より校務を処す。林若樹ニ書を投す。近松会之件ニ関す。児機の書到る。返書を投す。近松会之件ニ付、坪内大造来る。同伴ニ付、伊原青々園ニ書を投す。登校事務を見る。今夜、高田、大隈(信常)、田中と松平頼寿伯を香雪軒ニ招飲す。

五日

雨。近松会之件ニ付、半迂来る。運動世界の件ニ付、水谷武来る。北堂より来書「(七四ウ) あり。近松会之事ニ付、内田不知庵を訪ふて話す。午後登校、校外教育部開始ニ関し、部員を会して協議を為し、其他之件を議して晩間

帰宅。下林貞雄より来書あり。機より電報にて送金の事を申越す。返書とし出す。

#### 六日

雨。近松会之件ニ付、坪井九馬三、幸堂得知ニ書を投す。大久保より依頼の石碑揮毫之件ニ付、石黒男ニ書を<sup>(七五オ)</sup>投す。広田金松より景樹の書翰を購ふ。山田清作来訪。添田寿一を興業銀行ニ訪ふ、不遇。木村衆市を訪ふて、朝鮮古鏡を見る。出版部ニ抵り編輯会議に臨む。学長と長時間校務を議し、夜に入り勢州を訪ふて帰へる。近松会之件ニ付、中村雁次郎、角田真平より来書あり。添田寿一の書ニ接す。

#### 七日

晴。半迂、近松会紀念印の件ニ付来話。<sup>(七五ウ)</sup>早朝より図書館ニ至り、赤堀、水谷等と近松陳列会之事務を処す。終日忙ハシ。不在中、真島平三郎来り、鮭の味噌漬を贈らる。大江乙亥門来訪あり。

#### 八日

冷氣大いに加ハる。兎機、北堂の書到る。お志保離縁の

件ニ付、下林貞雄来話。明日図書館ニ近松ものの并講義録を陳列するに付登館、其の準備をなす。午後一時より余、委員長として<sup>(七六オ)</sup>校外教育部規則の修正をなし、四時に至り本則の修正を終る。陳列事務を督し、夜九時に抵り帰宅。石黒男ニ囑したる石碑揮毫成る。陳列の件ニ付桂湖村来訪。

#### 九日

晴。本日図書館に於て、近松展覧会并ニ講義録展覧会を開く。六百人来会者あり。午後より大講堂に於て、近松ニ関する講演会を開く。水谷、饗庭、五十嵐力、島村、坪内演説す。<sup>(七六ウ)</sup>一時より六時に至り盛会。本日、真島平三郎、広田金松、中村六郎、桑田正、福田久松来訪。今泉雄作の書ニ接す。校友岩田助五郎の書ニ接す。石黒男、真島桂次郎ニ書を投す。原宏平、小田島彦太郎ニ書を投し、明後日、拙家へ招き書簡類、印類を示す之案内状を發す。和田万吉の絵はかき通信ニ接す。

#### 十日

日曜。小雨。昨日に引続き、近松展覧<sup>(七七オ)</sup>会講義録

展覽会を催す。来会者三百名。根本淳、根本八郎兵衛書画の鑑定をもとむる為来る。越佐会幹事来る。不在中、江部淳夫来る。終日展覽会来賓の応接に忙殺せらる。

#### 十一日

雨。広田金松来る。林羅山の詩幅一購ふ、価二十円也。下村昇之助来話。木村正辞、原宏平、小川為次郎の書ニ接す。図書館に至り、展覽会残務を処<sup>（モツ）</sup>す。又、近松詳解出版の事を水谷、種村と協議す。長岡発機の書ニ接す。福田久松来話、午後、小田島彦太郎、約ありて来らず、半日家居、雑録を筆して夜に入る。

#### 十二日

雨。早川純三郎、第二期刊行会を起すニ付、余を顧問となす件ニ付来話。学長を訪ふて、出版経営の事を協議し、細川侯邸を訪ふて、基金寄付の件を談す。登校、事務を見、午後より英堂と会す。<sup>（モハオ）</sup>帰途高木方を過ぎ春日シヨク（八足形）を購ふ。又、高麗青磁香合を借りてかへる。春日代金二十円即時払済。

#### 十三日

晴。桂湖村、斎藤書店等より来書あり。坂口五峰、吉田半迂、山田清作来話、登校事務を見る。午後より校外教育部規則修正委員会を開き、夕刻ニ抵る。竜動発佐藤功一の絵はかき来る。加賀翠溪の書ニ接す。晩間お志保問題ニ付、鎌田松三来る。<sup>（モハウ）</sup>欣二の件ニ付、北堂より来書あり。直ちに長文の答書を発す。

#### 十四日

快晴。早朝外出。小川鉾吉を訪ふて、基金寄付の事を談し、横山又次郎を訪ふて、北極ニ関する講話を依頼し、角田竹冷を訪ふて、俳話を試み、木村糸市を訪ふて、其の蔵品を見、末広ニ午晡。その上、大丸ニ下村正太郎を訪ふて話し、五時、南高縄ニ渡辺千秋を訪ふ、不在。執事ニ就て来意<sup>（モルオ）</sup>を云々し、夜に入り帰宅。本日又、水谷を訪ふて、近松詳解出版の件を話す。桂五十郎、下村正太郎ニ書状を発す。下林貞雄の書到る。

#### 十五日

好晴。講義録陳列ニ付、所懐の一篇を講義録ニ掲載せんと欲し、平野法梁を招き二時間程、口授筆記せしむ。早



川純三郎、山田清作、赤堀又次郎来訪。十時より登校、事務を見る。学報編輯会議に臨む。晩間、下村昇之助来」(七九ウ) 話、金五百円領掌。

十六日

晴。三越呉服店に招かれ、臨時開設せる風俗ニ関する古代絵巻の陳列を見んとて、九時頃ゆく。高木方ニ立至り骨董代二十円払入。午後より登校事務を見る。又、維持員会ニ出席す。倫動発井上辰九郎の絵はかき来る。進歩党非改革派より、改革派と融合成りたる旨の報告書来る。広田へ羅山幅代二十円払済。」(八〇オ)

十七日 秋季皇霊祭

好晴。落合、高田へ土地代金之内、三百円払。これにて残額二千五百円也。氷川神社寄付金十円、高田へ渡す。お志保一件ニ付、丹呉勝吉帰県ニ付来り見る。刊行会第二期開始ニ付、林、早川、山田来話。大丸土地売却之件ニ付、興業仲介所の清水慎太郎来る。午後、勢州を訪ふて帰途、野田屋ニ立寄。高麗堀出し雲鶴手青磁の杯并ニ杯台を獲、価二十円也、即納。林より、寛」(八〇ウ) 政頃

の公家の書簡數百通を贈らる。皆北小路に与へたるもの也。吉田半迂来訪、近作を示さる。

十八日

小雨。平野法梁、余の講義録ニ関する談話を筆記し来り、校閲を請ふ。西尾豊の書ニ接す。直ニ答ふ。校外教育部規則ニ付青柳、伊藤正の書ニ接す。午後より小田島彦太郎来る。印、骨董の類を示して共ニ翫賞、家に入り別る。」(八一オ)

十九日

雨。北堂より来書あり。学長宅ニ校外教育部規則修正を協議し、午前九時より夜に入るまでかゝり漸く稿を脱す。

二十日

雨霽。今朝、書翰卷四、崑山小幅、表具屋ニ托す。学報記事を作る。高木方ニ抵り自然木の台を獲、代金即納。英堂を見る。午後より学長邸の職員慰勞園游会ニ臨む。夕刻、日本銀行「ハ一ウ」に在勤之校友上野精養軒ニ会す。幹事と共に出席、基金募集をなす。会するもの二十数人、寄付額二千五百円。京都の宮原正喬より松茸老箆を贈り

来る。

## 二十一日

晴。広田金松より木像一贈らる。木村勘之助来話。二人曳にて楠本正敏を訪ふ、不遇。山口俊太郎、原田金之祐、昆田文次郎を訪ひ、又、黒田侯の家令中山某と話す、皆な学校基金の件ニ関す。」(八二ウ) 登校の後、大隈伯を訪ふて刊行会終了ニ付、評議員を会し、紀念会を開く事を云々し、出版部の事務を見て帰宅。宮原正喬へ礼状を發す。

## 二十二日

晴。小田島彦太郎、斎藤精輔、旗野蓑織ニ書を投す。赤堀又次郎より来書あり。午後、高田同伴、山沢俊夫親戚片野邑平を原宿ニ訪ふて、半日、其の所蔵の画幅を見る。帰路、三人、四谷ニ飯して帰へる。郷里における内子の母、病あり。」(八二ウ) 見舞金十円投郵。

## 二十三日

晴。林家遺草、表装之為表具屋へ遣す。午後より出版部ニ抵り、薄暮迄事務を見る。浜村蔵六、小田島彦太郎

の書ニ接す。晚餐後出版部の件ニ付、坪内を訪ふて話す。西尾豊為替入書状ニ接す。今夜機、長岡より帰京。

## 二十四日

晴。日曜。朝来越佐会幹事、会之経画に付来話。池久吉、朝倉亀三、」(八三オ) 桑田春風、山田清作来訪。午後より、すみ、みつ同伴、浅草辺に散策し、百花園を訪ふて帰へる。坪内雄蔵の書ニ接す。浜村蔵六来訪、置酒して深更迄話す。古印一を購ふ。(八三マ) 宗元の味を有するもの、価十円即納。本日、不在中桂湖村来訪。

## 廿五日

晴。二人曳にて早朝より井上角五郎、金子堅太郎、楠本正敏、黒田侯爵邸を訪問す。弘文館に林を訪ふて話し、丸善」(八三ウ) ニ小柳沢を訪ふ、不在。登校事務を見る。西尾豊ニ書を投す。夕刻より、同人の催しに係る光風会ニ出席す。書画など持寄、互ひに鼻をうこめかすか目的也、十七八名来会あり。

## 廿六日

小雨。早朝、佐野辰三郎、山口県図書館協会の件ニ付来

話。本田信教を招き越佐会の事を云々す。山田清作、第二期刊行会の件ニ付来訪。高木方を訪ふて二、三の骨重を購ふ。表慶館ニ至り列品」(八四オ)を見る。英堂を見る。晩間、浜町常盤ニ晚餐をとみにす。伊藤公ハルピン出張中、韓人ニ狙撃せられ即死の電報あり。今井貫一、水谷弓彦、林縫之助、黒川真道の書ニ接す。

#### 廿七日

曇。広田金松、南朝文書を携へ来り見す。吉田半迂来る。登校事を見る。小師橘三郎来話。出版部に至り運動世界出版の事を処す。横尾小野より法事の蒸物を贈り来る。香典」(八四ウ)二円郵送す。浮田和民より勝海舟、松平春嶽の手簡各一通贈らる。校友弁護士森保助三郎来話。小田島彦太郎より、浚明の系譜を贈らる。

#### 廿八日

小雨。商科生錫田良之輔来訪。増田義一、林縫之助、小田島彦太郎ニ書を投す。文部省展覧会に現代画家の作品を見る。帝國図書館ニ西村竹間、朝倉亀三を訪ふて、図書館協会、刊行」(八五オ)会出版材料等の話を話す。登校

事務を見る。又、出版部に抵り要件を処す。吉田東伍を訪ふて、天長節の講話を托して帰へる。賀田直治第二子の祝として、紅白の餅、鯉節各壹函を贈らる。中野平弥之仏事あり、香典二円郵送す。水谷弓彦へ五十円封入、書状を投す。

#### 二十九日

小雨。刊行会評議員会ニ関し、豊川良平ニ書状を發す。広田金松より南朝文」(八五ウ)書一卷、半時庵書翰一卷を購ふ。今泉雄作の書ニ接す。半日家居、家事を整理す。午後登校、事務を見る。帰国中の勝吉、帰京来訪。お志保の件ニ関し北堂之書を得。蒲生庄七より越後梨果一箱を贈らる。欣二出京ニ付、鎌田、下林来訪。相談中、下林方へ預り置きたる同人、又々、外出帰宅せずと電話かかり来る。困りもの也。北堂ニ返書さし出す。

#### 三十日

好晴。赤堀来訪、仏書出版之件ニ付協議す。小田島、林の書ニ接す。会津八一より菓子を贈らる。又、郵書一通来る。午後より登校、横山博士の北極談を聞く。出版部

之事務を見、夜に入り帰宅。図書館協会々金五十円預る。朝倉亀三来訪、依頼し置し刊行会第二期出しもの、珍書類従十二巻の目録成る。不在中桑田春風、黒川真道来訪。

### 三十一日

「(八六ウ)

晴。日曜。黒川真道、山田清作、刊行会の件ニ付来る。

鐘美堂の編輯員斎藤広蔵、余の論稿を請ふ。諾してかへす。小田島彦太郎、坂本桂治、余の蔵品を見んとて来る。即ち書画類を出し共に展観す。偶々坂口五峰来訪、主客午餐を与にす。二時、皆去る。英堂を訪ふ。晩間帰宅、旗野蓑織来訪。広田金松、赤堀又次郎の書ニ接す。今日、小田島、坂本家蔵の先哲書翰二、双魚堂目錄上巻持去る。」(八七オ)

### 十一月

### 一日

快晴。昆田来訪、新発田藩祖三百年祭祀文起草の事を云々す。桑田春風へ山陽書簡の写を贈る。在茅ヶ崎斎藤精輔ニ書を投す。登校事務を処す。赤堀、吉田(東伍)ニ

書を投す。六日刊行会評議員会之件ニ付、大隈邸を訪ふて帰宅。本日、伊藤侯遺骸着京。出版部員渡辺文三来る。不在中、蒲生庄七来訪。新潟県学生川村より大梨子を「(八七ウ)贈らる。夜に入り内子と散策、盆栽を購ふてかへる。

### 二日

晴。午前家居。東京市長より、市設図書館評議員満期ニ付、謝状を送り来る。又、改めて囑托する旨之依頼書も同時ニ来る。松平頼寿伯、赤堀又次郎の書ニ接す。高木を訪ふて骨董を見る。午後登校。松平伯来訪。其の私蔵之図書分類之件ニ付云々の依頼あり。仏書出版に付、赤堀を招へて、「(八ハオ)部員と長時間協議す。夜に入り越佐会幹事会ニ臨み帰宅。斎藤精輔の答書ニ接す。桑田春風の書ニ接す。琳琅閣ニ図書館分払百円相渡す。

### 三日

天長節。好晴。本年より早稲田大学ニ於て、天長節を祝する事となり、午前九時より、中庭に於て三校の学生を会し、学長式辞、吉田東伍天長節の由来、大隈総長、聖



徳を頌する演説あり。形式に流れず、早稲式一風の祝典なりし。」(八八ウ) 山田清作、刊行会の件ニ付、和泉、越佐会昨夜の幹事会を報告ニ来る。午後より散策。野田庄を訪ひ、夕景迄骨董を見、印材数顆、平戸染付方形大肉地を購ふて帰へる。

#### 四日

曇。伊藤公国葬ニ付、学校其他休業。赤堀之書ニ接す。斎藤精輔、浜村蔵六ニ書を投ず。種村、出版部の件ニ付来訪。鎌田松三来話。坂口五峰、又踵て来る。午時、同伴明進軒ニ飯「八九オ」す。相別れて英堂を見る。今夜、吉田東伍と共に五峰ニ招かれ、上野常盤華壇ニ抵る。南義次郎も上京中にて、来り会す。不在中、桑田春風来る。午後より雨あり。

#### 五日

小雨。山田清作来る。二、三の書状を發す。登校、学長と基金募集の事を協議す。出版部の編輯会ニ臨む。館山漸之進より林檎を贈らる。安田恭吾、青木夙夜の山水を齎らし来りしめ「八九ウ」す。赤堀又次郎ニ答ふ。今夜、

松平頼寿伯ニ招かれ、大隈信常、田中唯一郎と共に浜町岡田ニ行く。重野安繹の書ニ接す。

#### 六日

晴。広田金松、安田恭吾来る。斎藤広蔵来つて斯民読本の稿を請ふ。即ち意見を口授して筆記せしむ。越後柿崎警察署より、欣二を引取るべき旨申来る。登校事務を見る。午後より、大隈邸ニ刊行会評議員「九〇オ」会を開き、第一期納会を催し、余より会の経過を報告す。来会者二十余名、晚餐を共にして散す。田中義成、朝倉亀三の書ニ接す。又、浜村蔵六の書ニ接す。吉田半迂、丹呉勝吉来る。米国前大統領ローズウェルト父子、アフリカ猛獣狩獵中、象群の襲ふ所となり惨死すとの報あり。後ニ虚伝なること判明す。

#### 七日

晴。校友大久保より物を贈らる。山田清作、刊行会の件ニ付来話。南義二郎、「九〇ウ」小田島彦太郎来訪ニ付、図書、書画を出し共ニ展観、午餐を与にして別る。小久江、出版部の件ニ付来訪。山口県佐野辰三郎より来書あ

り。又、久須美秀三郎の書ニ接す。今夜、加賀翠溪に招かれ、京都の島文次郎と共に赤坂三河屋ニ晚餐の饗を受く。在韓友年亀三郎より來書あり。

#### 八日

雨。広田金松来る。赤堀、早川、山田、刊行会の件ニ付來り、午前中目録編成ニ」(九一オ)協議を遂げ、大体定まる。登校事務を見る。日清印刷会社ニ抵り、坂本嘉治馬と沙翁集出版の件を協議し、去つて久須美秀三郎を訪ひ、名家書簡を閲覧して歸へる。吉田半迂ニ松平伯藏書印、披雲閣并孝信閣二印の模を托す。欣二の件ニ付、泊町警察署よりお志保同伴、今夜々汽車にて東京へ来る旨電報あり。三省堂より坂巻登介來り、図書館寄付金の件を云々して去る。」(九一ウ)

#### 九日

曇。下林來訪。おしほ、今朝欣二を伴ひ来る云々。丹呉の謹慎中のおしほを東京へ遣したるは、奇怪也と語り合ひ、長文の郵書を丹呉へ投す。増子名儀にて借り受けたる鹿島銀行之手形期限ニ付、六十日延期の手續を爲す。

登校事を処す。來月、京都大学図書館に於て、陳列会あり。出陳の医書を検出す。帰宅後、大江乙亥門來訪。タルハム発和田万吉の絵はがきを領す。」(九二オ)

#### 十日

晴、大風。広田金松ニ骨董代十五円渡す。山田清作來る。高木方ニ至り、紅花綠葉推朱蓋香合、小堀和泉守証書三通、馬犀角杯共十三円也払済む。上野ニ理髮し、勢州楼ニ英堂と午哺を共にし、夜ニ入り帰宅。寺部治助の書ニ接す。

#### 十一日

寺部治助來り、物を贈らる。三館二郎來り、孤兒院趣意書之鶴黄を托して去る。」(九二ウ)小島七郎、名家書簡を携へ來り審定を請ふ。三越より十三日陳列会の案内来る。姫路発高田学長の郵書ニ接す。登校事務を見る。

#### 十二日

晴。林縫之助來り、芭蕉自筆の鹿島紀行をしめす。価百五十円と云ふ。しばらくあづかる。刊行会第二期の事を協議して去る。東亜同文会の田切源太郎来る。登

校事務を見る。小林堅三に事を托す。高木方に骨董を「(九三才) 見る。こまの香合(石州箱書) 一、外二点を購ふ。不用ものを代物に遣し、此口勘定済む。細書を認めて、北堂へ郵送す、お志保の事ニ関す。

十三日

好晴。小川為次郎、島文次郎ニ郵書を発す。羽田智証の書ニ接す。山田清作、三館一郎來訪。種村宗八の書到る。田中光広を角田真平ニ紹介す。登校、出版部の事務を見る。清水広博の書ニ接す。同文会田切より物を贈らる。「(九三ウ)

十四日

好晴。日曜。同文会田切源太郎、神樂江卷石、安田恭吾等來り半日を消す。午後散策、安田恭吾を訪ひ、又、高木弘を訪ふて、薄暮家ニかへる。

十五日

好晴。志保一件ニ付、丹呉井北堂の書状来る。早朝より二人曳にて浅田徳則を訪ひ、草邨を隆文館に訪ひ、下林を衆議院ニ訪ひ、本野盛亨の病「(九四才)」を訪ふて、午時

英堂ニ会し、晚間家ニ歸へる。夜に入り川田来る。在韓井上雅二宛書状を交付す。今泉雄作より來書あり。真瀬中洲伝を取調べ送り遣さる。これは漢籍国字解の資料也。直ニ今泉へ謝状を發す。渡辺華山山水草稿の一幅、裝潢成る。

十六日

晴。原宏平の書ニ接す。広田来る。南朝古文書三十円之内十四円五十錢也「(九四ウ) 払済。北堂の書ニ接す。隆文館の草村松雄來訪。寺部治助の書ニ接す。登校事務を見る。学報編輯会を開く。沙翁碑面の刻本摹刻を命じたる処本日出来、成蹟可也。自分同好ニ撫本を頒たんと欲し、刻したる者なれども、図書館てんがくかんき蔵となすに決す。下村昇之助の書ニ接す。下林、欣二を伴ふて来る。将来の説諭をなして返す。大久保正太郎より、子息のことにつき謝意を表し来る。安田恭吾來り、大雅の幅を示す。下林より華山筆蔡「(九五才) 君謨肖像の幅を預る。お志保の暴言につき、一書を北堂に呈す。

十七日

好晴。早朝より二人曳にて、加藤正義を訪ふ。面会を約せるに付、正治を訪ふて話して去る。松尾臣善を訪ふ。病中面会を得ず。去つて坂本桂治を訪ひ、其所藏の名家短冊集を見る。三井銀行ニ早川千吉郎を訪ふて帰宅。丹呉よりお志保離縁届書并ニ三百円為替金到達す。一、二校用を処（九五ウ）し、高木并ニ野田屋を訪ふ。野田屋より箔絵支那箱、建治二年の刻字ある銅製独鈷台を購ふ。各十円ツ、払済。新潟銀行より三百円為替金受取。金七十円也、欣ニ学資金として下林ニ預く。安田恭吾へ霞樵横卷残金十五円、大隈邸へ刊行会宴会費相払ふ。今泉雄作へ礼として菓子を為持遣す。

#### 十八日

「（九六オ）」

好晴。安田恭吾来る。いむべの印材、形水滴を購ふ。鳥居大路に十円渡、手紙を遣す。村山納之助より甘藷一俵を贈らる。丹呉に書を投ず。林ニ簡して、刊行会残務の切り上を督促す。三省堂の坂巻登介来る。図書館寄付金の内二百円領掌。小田島彦太郎来る。例のこたく古器を示し、午後迄互ニ賞玩す。柳里恭、澹泊、井上金蛾、

島□、月池、椿寿等の書翰数通を恵まる。画帖一を贈り謝を為す。又、小田島より唐本鶴林玉露、海屋補筆（九六ウ）筆本一帙を示さる。伊藤退蔵旧蔵にて、補写十数紙ニ及ぶ。珍とすべきもの也。前日、表具師ニ托したる名家書簡三卷取もとし、小田島より贈られたるを追加し、更らに四卷として、表具屋ニ托す。廿八日、森盛一郎、結婚披露案内状来る。江部より産祝物来る。終日家居。

#### 十九日

広田金松来る。骨董代十三円五十銭払。村山納之助へ芋の札状を發（九七オ）す。登校事務を見る。高木方ニ骨董代六円払。昔し淀川筋に食はんか舟の用ひたる遺器を購ふ。外ニ竹の茶箱一を購ふ。英堂を見る。晚餐を共にして帰へる。国字解製本出来、第一巻を贈り来る。

#### 二十日

好晴。登校事務を見る。学長、今朝兵庫県より帰京。余の身後の経営ニ関し、半峰を煩し、小川簡堂ニ依頼之一千円出金之件、小川快諾之由。讃岐の（九七ウ）上野昌平



より、松平家の蔵書印（披雲閣云々）影を郵送し来る。  
出版部の事を処して帰宅。高木を訪ふて、落葉式論、溪  
硯一面、初代琢斎木彫置物、南京印画盆を購ふ。勘定之  
内へ金十三円払入。

#### 二十一日

好晴。日曜。赤堀、山田、朝倉来会。朝来、刊行会第二  
期書目の件ニ付協議す。児女を伴ふて両国技館の菊花  
を觀、与兵衛ずしに午餐を」（九八オ）した、め、三輪潤一  
郎を訪ひ、浅草に遊ぶてかへる。小川為次郎ニ長簡を發  
す。

#### 廿二日

快晴。朝来大掃除を行ふ。避けて高木方を訪ひ、小杉彰  
遺什二点を購ふ。一嵐山、二軒茶屋天目台。一は唐物長  
蓆盆、代金即納、一円也。勘定の内へ遣す。登校、午後  
迄事務を見る。林縫之助、今泉雄作の書ニ接す。在外小  
波山人より絵はがき消息あり。増田義一、坂口五峰并ニ  
在郷の」（九八ウ）北堂ニ郵書を發す。英堂を見る。

#### 廿三日

大祭日。好晴。丹呉より戸籍謄本を贈り来る。佐野友次  
郎之書ニ接す。下林来話。鳥居大路代人来る。午後より  
学校に於て校友会幹事会を開く。終つて伯邸園ニ於て例  
之如く、秋季の園游会を催す。在英国和田万吉より絵は  
がき消息来る。斎藤兼蔵より来書あり。」（九九オ）

#### 廿四日

雨。山田清作、吉田半迂来る。小田島彦太郎、郷里より  
一簡を寄せ来る。又、八ツ橋梅茶の書簡一幅贈らる。高  
木を訪ふて明珍遺作の断片に銀を取り合ハせて作りたる  
湯沸し一を購ふ。勘定の内へ金十円入る。午後より登校  
事務を見る。井上雅二の書ニ接す。日本橋区図書館開会  
式ニ付、市長より案内状来る。野田庄を訪ふて、勘定滞  
払済。白玉香合一個を購ふ。価二十円之内四円内払。出  
版部より新刊」（九九ウ）高田逸次郎の微分積分学を贈り来  
る。小田島、昆田、英堂ニ書を投す。

#### 廿五日

晴、風。種村、出版部の件ニ付、加藤、図書館協会の  
件ニ付来訪。半迂来り自製之肉池を示さる。広田金松ニ

書を投ず。登校、事務を見る。下村正太郎、山口俊太郎、前島男ニ書を接す。満鉄理事より、廿七日満州史蹟參考品陳列ニ付案内状来る。又、廿九日市図書館評議員会の通知来る。小川「(二〇〇才) 為次郎より書留にて三百五十円郵送し来る。右は小川所望にて、余珍藏の経巻五本を割愛ニ付、其代価三百円要求の処、五十円加へて買ふべしとて、右の送金あり。夕刻、児等の為め上野ニ物を購ひ、松兼に飯してかへる。

#### 廿六日

晴。山田清作、広田、半迂等来る。高木方を訪ふて、明嘉靖製大香盆、藤四郎作飾壺を購ふ、代価即納。小川ニ割愛せる古經の謝礼「(二〇〇才) にとて贈られたる金を品にかへ、聊か友人の芳志を謝さんとす。小川ニ簡して右の事を通報す。第三銀行ニ抵り、小川送金三百五十円請取。午時、英堂を訪ひ午餐を与にし、晚間帰宅。五泉よりおさき出京。朝倉亀三より、地方叢書の目録を送り来る。越佐会之件ニ付、本田信教来訪。

#### 廿七日

晴。浜村蔵六の計に接す。山田清作来る。二人曳にて朝餐後、直ちに切通し野田「(二〇一才) 屋を訪ふて一、二の骨董を見、蔵六の居を訪ふて不幸を慰問し、藤堂高紹伯を訪ふて、図書寄托の件ニ付打合をなし、両国付近ニ飯し、午後、靈南坂町ニ大木遠吉伯を其病牀に訪ふて暫時話し、青山ニ中山孝麿侯を訪ふて、学校へ寄付金の事を謝し、それより麻布狸穴満鉄支社ニ催したる金時代の金石類陳列を観、薄暮家ニ帰へる。

#### 廿八日

好晴。日曜日。神楽江卷石、絵を齎らし来る。半迂、館山漸之進、種村宗八、山田清作来話。増田義一ニ書を投ず。高木方を訪ひ、又、野田屋を訪ふて、野田屋より三ツ組盃、竹の大筆筒(皮はり、山水精刻価三十二円)、右二点代価払済。天王寺に抵り浜村蔵六の葬儀ニ臨む。森槐南に会す。満州負傷の事を聞く。佐野辰三郎之書ニ接す。今夜、森盛一郎の結婚披露ニ招かる、行かず。増子喜一郎来話。半夜大雨あり。「(二〇二才) 来る。

#### 廿九日

晴。下村正太郎、昇之助来る。相伴ふて高田を訪ふて、改革之件ニ付協議す。日本銀行総裁以下より金壺万円、

学校へ寄付あり。登校事務を処して後、市役所ニ抵り市図書館図書館外貸出規則の評議員会ニ臨み、高木方を訪ふて猿鈕糸印壺類を購ふ。勘定の内へ金十円入る。図書館協会之事ニ関し、渡辺又次郎の書ニ接す。夜に入り大暴雨あり。雷鳴とどろく。」(一〇二ウ)

### 三十日

晴。山田清作、広田金松来る。広田より、青磁の花生を購ふ。高木方より挿箱二個を購ひ入り、近購の骨董類を収め、これ迄紛雜を極めたる庫中を整理す。登校事務を見る。沙翁集表紙意匠ニ付、坪内逍遙を訪ふて協議し、出版部ニ抵り係員ニ意匠の指図をなし、高木を訪ふて、一、二の骨董を購ひ、日本俱樂部に抵り、三瀧、永井、遠藤等、」(一〇三オ) 欧米留学帰朝者の祝宴ニ臨み、十時帰宅。本日午前、地震あり。小川為次郎の書ニ接す。」(一〇三ハ)

## 十二月

### 一日

好晴。早朝下村兩人来訪。同伴、豊川良平を訪ふ、不遇。内田耕作、山口宗義、三田信、首藤諒の日本銀行理事を訪ふて、学長ニ代り近日寄付金之謝意を表す。高木方に骨董を弄し、午後一時より上野図書館を会場として図書館協会大会を開き、評議員の半数改選を行ひ、編纂規則の件を協議し、互ひに持寄りたる珍」(一〇四オ) 書を展覽し、会食後散す。来会者五十名。西尾豊の書ニ接す。湯浅吉郎より、京都市図書館に近く催したる俳書展覽会の記念絵はかき二十数枚を贈らる。鍵富岩三郎より来書あり。

### 二日

晴。鵜田良之輔来訪。登校事務を見る。又、出版部の事を処す。高木、野田屋を訪ふ。野田屋より紫檀之棚を購ふ。価三十円、内金十円払済。成功雜誌社の書ニ接す。晩間英堂を訪ふ。機、昨」(一〇四ウ) 夜より熱発、高し。

### 三日

晴。朝来下村一件ニ付、豊平良平（マツ）としばく交渉す。松平頼寿伯を訪ふて話す。機病症并ニ今後の事ニ付、橋本左武郎を訪ふて話す。高木方ニ時代箱、磬并乾漆印を獲て帰へる。午後より登校、出版部の事務を処す。鍵富岩三郎に答ふ。明日岡崎正也より、北堂古稀の祝宴之案内来る。松平伯より七日、岡田ニ招飲之案内状（二〇五オ）来る。

### 四日

好晴。校友坂入準三を菊池晋二に紹介す。平野履道、山田清作来る。館山漸之進に書を投す。高木を訪ふて、九太の火爐、青玉大筆洗を購ふ。九太の口払済。午後、日本橋倶楽部に開会之岡崎正也北堂古稀の祝宴に招かれ、其の珍藏書画の列品を観る。

### 五日

日曜。好晴。五十嵐力、下村正太郎、赤堀又次郎、桑田正、広田金松来訪。広田より堀出韓鏡一面を購ふ。価五円払済む。十時より大隈伯邸ニ越佐会大会を開く。出席

者百名、盛会。午後高木、安田を訪ふ。夕刻より富士見軒ニ於て、早稲田中学出身校友会ニ臨む。

### 六日

晴。早朝、下村のために豊川良平を訪ふ、不在。下村同伴、高田を訪ふて近日大坂行を決す。登校、基金の件を協（二〇六オ）議し、午後より理工科の件ニ付協議す。高木方を訪ふて一、二の物を購ふて帰へる。水谷弓彦、上野喜永次、松平頼寿、印刷会社等の書ニ接す。廿四日、安田善之助宅欣賞会の案内状来る。

### 七日

晴。吉田半迂、沙翁碑の撫本を齎らし来る。紅水晶印三顆を購ふ。増田義一を訪ふ、不在。野田屋を訪ふて金欄手蓋物、黒ぐり盆を購ふ。英堂を見る。（二〇六ウ）今夜浜田岡田へ松平頼寿ニ招かれ行く。命尾の謡曲を聞く。宴會中、坐敷障子震動す。浅間山噴火の鳴動の余響なりと云ふ。深更家ニかへる。

### 八日

晴。吉田半迂、山田清作来る。丹呉翁ニ書を投す。玉山



太閤記注文ニ付、郵便ニ差出す。増田義一を訪ふて土地経営の件を話す。高木を訪ふて古九谷水仙模様の皿五客購ふ。今夜、日本橋俱樂部ニ学校の基金管理委」(一〇七)員会を開き、四十三年度同科経営ニ要する支出之件を協議す。森村、前島、大橋外学校幹部出席。石橋湛山の書ニ接す。

#### 九日

好晴。早朝、井上角五郎を訪ふ、不在。山本達雄を訪ふて基金の件を話す。金子堅太郎を訪ふ、不遇。町田忠治を旅宿ニ訪ふて、下村の件を協議す。昇之助を大丸ニ訪ふ、不在。清水宜輝を丁酉銀行ニ訪ふて、千円借入之件を依頼し、其」(一〇七)の承諾を得。増田義一を訪ふて帰宅。無名通信の井口越南来る。神楽江卷石、不在中來り画を贈らる。昆田より越後塩引を贈らる。機、保養之為平塚へ向け出発す。登校事務を見る。神楽江卷石ニ書を投す。又、草村松雄ニ書を投す。高木方を訪ひ、勘定の内へ十五円納付。

#### 十日

晴。坂入準三の書ニ接す。神楽江卷石、赤堀又次郎、吉田半迂来る。出版部」(一〇八)ニ出張、部長と共に部員ニ慰労金を与ふ。余の受くる所三百五十円也。登校事務を見る。下村昇之助、町田忠治ニ書を投す。学報編輯会ニ臨む。増田藤之助ニ辞書編纂の督促談判を為す。高木を訪ふて金四十円勘定之内へ入る。常盤花壇ニ晚餐をした、めてかへる。前田秀村より詩仏の墨竹一幅を贈らる。

#### 十一日

晴。赤堀又次郎來訪、前田玄以の消息一通」(一〇八)購入。無名通信社の井口越南、同社の美人号に掲ぐべき美人ニ関する余の説を徴す。即ち口授、一時間筆記せしむ。郷里の真島両家、丹呉、佐藤伊助、蒲生庄七、台湾の賀田直治、和泉文三に歳暮品を差出す。北堂へ為替入書状を発す。増田藤之助ニ辞書ニ関し一書を投す。午後より出版部に於て社員会を開き本年度の決算を議し、配当額を決す。夕刻より漢籍国字解成功祝宴を開き、維持員、其他此」(一〇九)件ニ関与せる部員并ニ印刷会社職員三

十余名を招待す。英堂を見る。又、高木方ニ物を購ふ。東京市役所より図書閲覧優待券を贈らる。下村昇之助より大丸計算書を贈り来る。機、出先より興津（佐野屋止宿）へ転したる旨を報し来る。

### 十二日

晴。日曜。睡眠不足のため朝来頭痛を覚ふ。下村計算書を町田忠治ニ返致（二〇九ウ）す。機ニ為替入書状を遣す。井口越南ニ書を投す。高木を訪ふて骨董を見る。阿蘭陀本綿敷物を購ふ。本野盛亨の訃ニ接す。桑田春風手紙雑誌の材料をもとむる為めに来る。即ち二、三を与ふ。熱海樋口屋より例に依り山芋を送り来る。

### 十三日

曇、寒。種村、小久江、平野、高田俊雄を招き高等国民教育の改良案を協議し、正午ニ至る。山田清作来り（二一〇ウ）沙翁傑作集の製本を齎らし来りしめす。午後より登校、学長と講義録の事を協議す。下村昇之助より来翰あり。

### 十四日

晴。機より来書あり。町田忠治ニ書を投す。岩田助五郎の書ニ接す。安田恭吾来る。其所蔵の白檀彫出山之釈迦を購ふ、価五十円也。土地経営費、来年一月小川為次郎入金千円を担保として、金壹千円也出版部より一時借入る。河合仙（二一〇ウ）郎、高田弥一郎ニ書を投す。町田忠治と大隈邸ニ会し、下村件を協議す。本野盛亨の葬式ありしも、時間、町田と協議時間とさし合、終ニ行く能ハす。一郎男ニ断り状を發す。高木方ニ至り、勘定内へ二十円入、伊部水指を購ふ。機、帰へる。

### 十五日

朝来寒氣の加ハるを覚ふ。安田恭吾、広田金松、赤堀又次郎来訪。登校、（二一一ウ）校外教育部の発会式ニ関し、学長、青柳等と協議決定する所あり。午後出版部に抵り、運動世界新年号の件、并ニ中学講義発展之件等を協議す。賀田直治の郵便に接す。

### 十六日

晴、寒。下村昇之助来話。広田金松より骨董を購ふ。江部淳夫来話。登校事務を処す。薄暮学校を辞し、去つて

英堂を見る。野田屋へ棚残金二十円払。赤塚啓作より味噌漬一」(一一ウ)樽を送らる。桑田正、斎藤書店等の書状到来。

### 十七日

晴。松山堂、写本を齎らし来り、鑑定を乞ふ。運動世界の事ニ関し水谷武来る。井口越南、前日口授の美人論筆記を持来る。訂正の上無名通信社ニ投す。林麿臣来話。

紫安新九郎、大坂市役所瓦解の件ニ付来信あり。午後より高木、野田屋方を訪ふて、紅玉香合一、雲鶴手堀出し青」(一二オ)磁等を購ふ。共に貴重の品也。赤堀又次郎より古筆一卷を購ふ、価三十五円也。天平頃の文書も収めあり、珍とすべきもの。

### 十八日

曇天。内藤久寛より台湾産朱欒若干を贈らる。在台湾の賀田直治より野菜数種を贈らる。団子坂道具屋河野研進、骨董を齎らし来る。永持総一、雑誌を新刊するに付、余の意見を徴す。多時談話の後去る。登校、印刷に付す」(一二ウ)べき学校の報告書を脩む。機に八百円為持、

高田弥一郎方へ遣す。残金二千五百円の内金也。寺部治助、蒲生庄七の書ニ接す。

### 十九日

好晴。日曜。坂入準三来訪、物を贈らる。山田清作、吉田半迂来る。桑田春風来つて、手紙雑誌の材料をもとむ。二、三の材料を貸付し、骨董ニ関する原稿を与ふ。小田島林香より岱海翁書版刻之詩を贈らる。丹呉より来書あり」(一二オ)越後塩引を贈らる。午後、高木を訪ふて番茶盆等を獲。林縫之助ニ書を投して、第二期刊行会の事を云々す。

### 二十日

晴。早朝、坪内を訪ふて沙翁傑作集の件、校外教育の件を協議し、登校、沙翁出版広告の件を協議す。神楽江巻石、前田秀村ニ書を与ふ。赤堀ニ古文書代金三十五円也払。今夜、吉熊ニ職員忘年会あり、出席。高田、田原と携へて川鉄ニ飯してかへる。在天津、中島」(一二ウ)半次郎の書ニ接す。末女美津、昨日来発熱、医師来り水痘と判す。不在中、林縫之助、竹谷作重来訪。

二十一日

好晴。林縫之助来訪ニ付、第二期刊行会の件を云々す。  
種村宗八、沙翁集広告の件ニ付来訪。高田学長来訪、日  
清印刷会社の相談役ニ余を推挙するの内談あり。北堂、  
真島信城の書ニ接す。高木を訪ふて骨董を見る。金十五  
円也、勘定の内へ払」(一四オ) 入る。今夜、大隈信常  
方ニ同人の謡曲会あり、余謡曲を解せされとも、饗応ニ  
招かれ行く。不在中、三輪潤太郎来訪、物を贈らる。館  
山漸之進より野菓、真島信城より梨菓を贈らる。

二十二日

好晴。下村昇之助ニ書を投す。心越隸書一行物、鑑定を  
乞ふため今泉雄作方へ遣す。加藤万作、本田信教来訪。  
野田屋ニ骨董を見、英堂と午」(一四ウ) 餐を共にし、審  
美書院ニ至り、学校之ため画屏風を購ひ、工業倶楽部ニ  
開会の日清印刷会社の総会ニ臨む。余相談役ニ推挙さる。  
終つて重役と共に築地縁屋ニ小宴を張り、九時帰宅。学  
校より歳暮として金百五十円送り来る。

二十三日

晴。広田金松来り骨董をしめす。黄楊木観音を購ふ。種  
村を招き出版部の事を処す。午後より」(一五オ) 高木を  
訪ふて、原叟在判杵香合を購ふ、珍器也。今夜、余主人  
にて、上野公園常盤華壇に各新聞社の早稲田文学出身者  
を招き、逍遙近訳沙翁ハムレット新刊の披露をなし、深  
更家ニ帰へる。余の文章を載せたる斯民読本刊成り、斯  
民会より贈らる。大江乙亥門妻来る。

二十四日

朝来晝屋来り、各室一斉に畳」(一五ウ) をはぎ始め居り、  
場所なきにくるし。朝餐後直ニ登校、出版部に於て商科、  
中学科、高等国民三科講義録改良の件ニ付、担当者を含  
して会議を開き、決する所あり。下村家へ預け置たる印  
刷株券房り来る。佐藤伊助より例年のことく鮭卵一函を  
贈らる。薄暮三室之畳かへ済む。川田治一、朝鮮行決定  
之趣ニ付来訪。

二十五日

快晴。種村宗八、沙翁反訳之件ニ付、小林堅三、上野、  
担当新聞ニ余の意見を載する件ニ付、国民新聞社員松岡



彦野、來年一月同社ニ維新志士の遺墨出陳ニ付、余の藏品を借受たしとの件ニ付、交々來訪。前田医師、広田金松又來る。吉田半迂より自製の澄泥研を贈らる。学長旅行ニ付、登校、諸般の打合を為す。高木方を訪ふて堀出高麗青磁天目台を購ふ。野田屋方ニ屋島製樂焼曲物形水さしを購ふ。共代濟。大丸より歳暮に「(二二六ウ) 大島紬を贈らる。桂五十郎ニ書を投す。

廿六日

晴。斎藤書店ニ図書館之仕払金貳百円渡す。坪内大造來る。桂湖村來訪ニ付、近く得たる骨董を示し、午餐をともにす。真島桂次郎より塩引を贈らる。和泉文三より來書あり。昆田文次郎、坂口仁一郎來話。藤林銀行より田中唯一郎裏書にて二百円、六十日期限約手にて借り受く事は昨日に属す。洩れ「(二二七ウ) たるを以つて補記す。

廿七日

晴。昨夜來感冒之気味あり。大江乙亥門、山田清作、種村宗八來訪。国民新聞社ニ於て志士遺墨展覽会を開くの催しあり、藏品の内崙山木像、清川八郎、頼襄書翰、

(マ)  
林士平自筆籠居百詠、頼三樹手書評点八家文、建治二年

獨鈷台を貸し与ふ。在台湾和泉文三より、同地産山蘭数株を贈らる。箱入となり來る。皆無事にて「(二二七ウ) 試みに盆中に移植すれば、なか／＼に趣あり。野田庄より時代存生風日本硯箱を購ふ。価二十八円也。払濟。賀田より台湾産文旦、香魚を贈り來る。文三ニ書を与ふ。ハムレット評論に付、京都の平田元吉ニ書を与ふ。「新発田の将来」と題する談話筆記を上野喜永次へ送る。午後より臥す。小滝淳の書ニ接す。

廿八日

晴。感冒之為尽日蔭中にあり。種村宗「(二二八ウ) 八來る。岡倉覺三、永持総一、朝倉龜三の書ニ接す。紫安新九郎の書ニ接す。

廿九日

晴。早川千吉郎と電話にて話す。前田侯爵より三千円早稲田へ寄付の事通知あり。斎藤兼蔵、松井郡治の書ニ接す。高田俊雄、出版部の事ニ付來る。高木方、野田屋方ニ抵り年末勘定をなし、二、三の骨董を購ふ。英堂を見

て帰へる。吉田東伍、玉壺集出版の件ニ付来訪。」(二二八)

ウ

### 三十日

晴。感冒未愈へす。朝来出版部員を余の宅に会して、講義録改良の協議を凝らし、正午ニ至る。井口越南、浜田健次郎の書ニ接す。午後より児を携へて上野ニ抵り物を購ふ。真島平三郎来る。氷壺集出版ニ付、吉田東伍来話。

### 大晦日

晴。感冒未愈へす、朝来蓐中「二一九」に在り。前田医師来り投葉す。蓐上、和泉田翁自叙伝を抄録す。落後生来訪。夕刻より小快を覚ふ。床を払つて家人と共に宴を張り、旧年を送る。表具屋ニ托したる十数の巻物類出来。」(二九ウ)

### (一一〇)―(一一一)白紙

### 歳晚総記

本年又暮る。往年重患に罹り、いつ死ぬるかと思素懷に

往来する身は、歳晚ニ際することに、多少の感懷なきにあらず。年は、繰返すものにて、平凡の事ながら無事一年を過せは、自から祝する事を禁し得ざる也。

本年は、余に取つて多端の年なりし。経営三、四年に涉りたる刊行会第一期、漸く其の終結を告ぐると共に、全身を早稲田大学ニ投する事となり、さては進むて基金部長となり、理「二三」事となり、校外教育部副部長となり、出版部主幹となり、印刷会社相談役となる。幾んと早稲田に於ける校務は、皆余の双肩にかゝり来る。随つて、従来見ざるの多忙を來したり。如斯繁劇の衝に当りても、体力のよくこれに堪ゆるに至りたるは、自家の尤も幸とする所にて、新年を迎ふに当り愉快を感じざるを得ず。

若しそれ趣味道楽の一事に就ては、己か生命也。一日之れ無き能ハす。紛雜の俗務によく堪へ得るは、一方「二三」これあるか故のみ。唯だ趣味は時に変遷す。本年に於ける著しき変遷は、書籍趣味の骨董趣味となりたる事なり。これ一は、圖書の近來得かたきに由ると雖とも、

一ハ骨董趣味一層深く興味を感じるに由る也。今年得る所甚少からす。骨董眼も漸く進歩セリ。要なき事とは云ひ、己れはこれに依つて生くと思へば、こゝに省略する能ハざる也。

明治四十二年十二月尽日

春城山人手記

(二三三ウ)

(二三三オ)